

# すまい職人きらりアップフォーラム2008

## 報告書



すまい職人の育成・確保の方策を探る



今だから、職人がおもしろい。職人の魅力発信！

# 目 次

1. 開催概要.....2

2. 主催者あいさつ.....5

3. 基調講演.....6

4. パネルディスカッション.....19



# 開催概要

今だから、職人がおもしろい。職人の魅力発信！

## すまい職人きらりアップ

### フォーラム2008

～すまい職人の育成・確保の方策を探る～

#### プログラム

13:15～13:20 挨拶 小田部 幸夫（青森県県土整備部長）

13:20～14:50 基調講演「伝統構法一筋 ～家をつくり・人を育てる～」

講師

島崎 英雄

- ・島崎工務店棟梁
- ・職藝学院（富山県）建築職藝科オーバーマイスター
- ・「ザ！鉄腕！DASH!!」の「DASH村」の古民家再生やTOKIOの大工修行に携わる。



日 時 / 平成20年10月21日 (火) 13:15 ~ 16:30 (開場12:45)

会 場 / アウガ5階 A V 多機能ホール

主催 / 青森県

後援 / 国土交通省・青森市・青森県市長会・青森県町村会・青森県商工会議所連合会・青森県商工会連合会・独立行政法人住宅金融支援機構東北支店・社団法人都市住宅学会東北支部・社団法人青森県林業協会・社会福祉法人青森県社会福祉協議会・特定非営利活動法人青森県消費者協会  
青森県職業能力開発協会・青森県住宅リフォーム推進協議会

#### 15:00 ~ 16:30 パネルディスカッション

「すまい職人の現状と課題 ~すまい職人が輝くために~」

コーディネーター

北原 啓司 (弘前大学教育学部副学部長)

パネリスト

二川目麻実 ((有)前田塗装:塗装工)

齋藤 義則 (丸喜(株)齋藤組代表取締役社長)

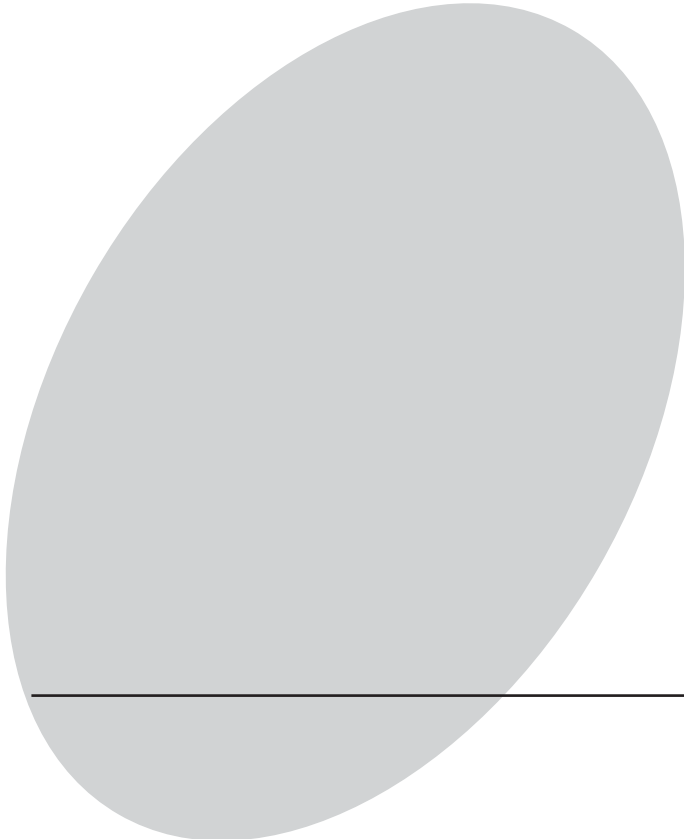
越山 成憲 (弘前高等技術専門学校訓練第二課長)

コメンテーター

島崎 英雄 (島崎工務店棟梁・職藝学院建築職藝科オーバーマイスター)

司会: 鈴木 育子





主催者あいさつ

すまい職人きらりアップ  
フォーラム2008



基 調 講 演

## 主催者あいさつ



青森県県土整備部長 小田部 幸夫

ただいま御紹介いただきました県土整備部長の小田部でございます。「すまい職人きらりアップフォーラム2008」の開催にあたりまして一言御挨拶申し上げます。

本日は、お忙しいところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。また、皆様方には、常日頃から、県政全般にわたる御支援、御協力を賜り、心から感謝申し上げます。

さて、近年、県内における住宅着工戸数が減少し続ける中、既存の住宅ストックにつきましては、住宅の耐震性の強化、高齢社会に対応したバリアフリー化、環境負荷の軽減のための省エネルギー化等、居住ニーズの高度化・多様化に伴う住宅性能の向上が求められており、住宅リフォーム市場の活性化が期待されております。

一方、住宅リフォームを促進するためには、悪徳業者の排除や契約の適正化等、健全な住宅リフォーム市場を整備することが必要とされております。

このような状況を踏まえ、県では、平成18年度から、県民が安心して住宅リフォームを行える環境を整備し、併せて、住宅産業の活性化等を図るために、「安心すまいアップ促進事業」を実施し、「青森県住宅リフォーム推進協議会」の設立をはじめ、住宅リフォームの相談体制や情報提供の充

実等に取り組んできたところです。

今年度からは、「すまい環境きらりアップ事業」とし、住宅リフォームに関するアドバイザーの派遣制度の創設、住宅リフォームや新築を担う若手職人の育成・確保のあり方を「すまい職人きらりアップ計画」としてとりまとめることなどを実施することとしております。

住宅リフォームや新築を担う職人については、高齢化が進んでいることや若年者などの新規就業者が少ないことなどから減少傾向にあると言われています。

この状況を放置すれば、青森県における住生活の基盤である在来工法による木造住宅に関わる技術の継承・向上が行われず、将来、県民の多様化・高度化する住生活のニーズに対応することができなくなることが懸念されます。

本日のフォーラムは、富山県よりお越しいただいた島崎工務店棟梁「島崎英雄」様の基調講演と県内で活躍されている方々による事例紹介や意見交換により、「職人の魅力について情報発信するとともに、職人の現状や課題をテーマとし、若者に魅力ある就業の場となるために何が求められているのか」を考えるために開催いたしました。

本日、お集まりの皆様方も講師の方々と一緒に若手職人の育成・確保の方策についてお考えいただければ非常にありがたいと思っております。

県と致しましては、皆様方と一緒に、青森県が「暮らしやすさのトップランナー」となるよう努めて参りますので、今後とも、より一層の御支援・御協力をお願い申し上げます。

それでは、「すまい職人きらりアップフォーラム2008」が実り多いものとなることと皆様方の御健勝、御活躍をお祈りして、開会の挨拶いたします。



## 島崎 英雄 【しまざき ひでお】

- ・島崎工務店棟梁
- ・職藝学院(富山県)建築職藝科(建築コース)オーバーマイスター

昭和18年富山県八尾町生まれ。昭和34年棟梁坂本国一氏に弟子入り。昭和48年島崎工務店を設立、現在に至る。また、平成8年4月に設立された大工と庭師を養成する富山の専門学校「職藝学院」建築職藝科のオーバーマイスターとして伝統構法を伝えている。多くの「民家移築古材再生復元」に携わり、富山県建築百選入選、日本伝統工芸富山展入選、第5回工務店の家コンテスト純和風優秀賞受賞など数々の賞を受賞。国立高岡短大産業工芸学科土木工芸専攻「公開講座」特別講師、八尾町HOPE計画推進委員などを歴任。NHK「未来派宣言」出演、日本テレビ「ザ!鉄腕!DASH!!」の「DASH村」の古民家再生やTOKIOの大工修行に携わるなど、多方面で活躍中。木を知り尽くした島崎棟梁による日本古来の家づくり。100年前の大工の知恵を解体から学び、その伝統構法と自然素材を用いた家づくり。「この家づくりを後世に残さないと、昔の大工さんに申し訳ない」と語る。

今ほど紹介されて、緊張しております。島崎でございます。職業は大工なので、あまりこういう所で喋るのは慣れていないので、私なりに標準語で喋ります。私なりに。それでわからないところがあれば、いつでも手を挙げて聞いてください。富山弁が多いので、学生がいつも言うのは、棟梁は何を言って怒っているのか全然分からん、と言って、それくらい分かりにくいそうなので、いつでも手を挙げて、分からない事は聞いてください。

今ほど紹介された富山県八尾町というところで今住んでおります。工務店もやっておりますけれど。富山県八尾町というところも、この青森県とよく似て、民謡がすごく盛んなところでございます。越中おわら節とか、こきりこ節とか麦や節とかいうのがあります。特に私の町内は、先ほどの越中おわら節でございます。風の盆ナントカといういろんなドラマも、ちょこちょこありますけれども。あんまり明るいイメージではないんですが、そういうことではこの青森とちょっと似たところがあるのかなと。私は夕べは弘前に1泊して、早速三味線を聴きに行っ

て、一杯飲んで帰ってきました。やっと念願が叶ったといえますが、1回、秋田までは講演に来たことがあるんですけど、青森から声がかからんと思っていたところへ、ちょうどありがたい話がきました。喜んで来て、早速三味線を聴きに行ってきました。

そういうことで、自分がやっておるその「伝統構法一筋」というのも、別に何の意味があるわけではないのですが、ただ世の中の流れに乗れなかったというのが、私は1番じゃないかと思えます。色んな建築の業界も、構法、プレカットであるとかプレハブであるとか色んな工業化された建築がたくさん出てきた。1回はその道に行こうと、講習を受けたりしたこともあるんです。今から、もう何十年も前の話ですけど、私が独立した時点で、私の弟2人を自分の弟子として養成する事になったんです。その時に弟等が講習を受けに行った時に、「いやあ、兄貴、俺はこんな仕事をするのなら大工にはならん」という話になりました。実を言うと私も講習を受けながら、「これはちょっと違うな」と。自分のやりたいことと違うなというのがあって、とりあえず若いのだから、今やっていることをどこまでやれるかやってみよう、という気持ちで前を向いて進んでおった。ダメになったら、又何か、若いんだから何をしてでも食べるよという簡単な気持ちで、やっておるうちにこういう所で立ちよって喋るようになったという、これまた不思議な話で。何かを一つやり続けておると、世間が変わって行ってでも、自分が変わらなかつたら、逆に目立ってきたと。普通、私が大工になったのは昭和34年です。その時分に私ぐらいの腕だからと目立つというはずは絶対無かったのですが、段々、段々そういう人がいなくなってきた。自分がそれをやり続けておただけで。

ここに若い人もたくさんおられますけども、私は大工になりたくて大工になったわけではありません。親が勝手に中学を卒業する時に、はい、お前はこうこうこういう親方のところにいつて修行せえと。大工になるんだ、と。へえ、そうなんだ、というぐらいで荷物を持ってその親方の家に住み込みの生活だったんです。四六時中、親方と一緒にあって、すごく緊張するとい

うか、そういうものだという事をどんどん言われて、聞きながらそこに行ったものだから、大変な思いをしたこともあります。しかし、15歳で弟子入りし、いま65歳なんですね。ちょうど中身いれると50年。あつという間でしたけれど。今は島崎工務店は弟たちが責任をもってやっておると。15人位いるんですが、10人位が卒業生で占めております。それというのも、別に必要性があってやっているわけでもないんですが、いや、又勉強したいと、もっとやりたいというので、卒業してからまた島崎に来て居すわって、段々、段々増えていった。そんな事で、私とはもかく職藝学院で一本槍で集中してやっております。青森からも卒業生が5人位いますし、現在も1人、1年生でおります。「俺今度、青森で講演するぞ」と言ったら、「あれ、僕ついていこうか」と言っていて、「お前、ここで勉強してないとダメだ」と言って連れてきておりませんけど。今年、高校を卒業してきた子です。

そんなことで、学校の学生の流れというか、沖縄から北海道まで、卒業したのを含めています。おかげさんで全国から来ております。しかし卒業してから、そういう学校で教えているようなことを、即、皆求めようとするのですが、中々そういうわけにもいかない。やはりいろんな修行をして、色んな建築をやって、そこで自分の道を開いていくとか。これは、やはり基本である道具を扱う事を2年間みっちりやります。だからどこかに就職をしてでも、例えばカンナで削るとかいうのは、褒められておるとするのは聞いておりますけど。そういう基本的なことをしっかり覚えれば、うちの学校に建築、大工の部と家具コース、それと建具コースがあります。それと造園もありますけれども。私はそれから3つのコースの1年生の時、1学期・2学期ぐらいを全部まとめて、道具を教える。それから夏休みが終わったぐらいから、各コースに分かれてやるという方式をとっております。だからかなり年配の学生もいます。一年生でやっても、親子以上に年が離れているのもあります。それでも1年生は1年生と、私は年齢関係なく厳しくやっております。

何か物を作る、自分の技術で物を作れるというのは、これは非常に、お金には代えれない



島崎英雄氏

ものがあるという。私は、趣味は何ですかと言われると、私は大工だけど、家具を作るのが趣味だとか、建具を作るのが趣味だとか言うんです。あとで少しは出ますけれども、やはりそれは道具を使うから、色んな物を作るんだという、だから道具だけはしっかり使えるようになれよと。そうすることで、色んな事ができるというので、1年生からどんどん鍛えております。2年生になると、こういうふうな実物教材とっていて、実際にお客さんに提供してもらおうというか、家を一軒建てる。あんまり大きいと、ちょっと無理だけど、学生の教材にしてもらえば、少しは安上がりということもありますし、仕上がりはそんなに素人には分かるほど、私らがついてやるんですから、そんなに目立つ事はない。というので、今まで色々やってきたのを、お客さんに見てもらいながら判断してもらおう。

そういったものを、このスライドでやりませうけど。ここのこれを見られると分かると思いますが、これもとりあえず教え子といいますが、3年間ぐらい通いました。毎日じゃないので、月に何日かという状態で、いわばTOKIOと仲良くなったんです。と言っても最初はTOKIOって誰なんか全然分からなかったんですけど。その年の紅白歌合戦に出たのを観て、初めて有名なんだなと言って笑っておりました。まさかこういう事にまでなってくるとは、夢にも思っておりませんでした。ここまで来たら、これ以上よそ見るわけにいかないの、もっとどんどん、どんどん伝統構法をすすめて後継者を育てていきたいなと。



TOKIOとDASH村（以下、講演内での映像）

大学に行って、建築科に行っても、ものすごい数の学生が卒業するわけですが、建築、実際に物を作る私の学校ですと、せいぜい多くても50人くらい卒業するくらいで、それが全国から来ておいたら、本当にどこに行ったか分からないくらいの人数です。だから就職率がいいです。そう思うと、大学の建築科を出て来ておるのも何人もおります。一級建築士で来ておるのもおります。やはり学校では教えてもらえなかったという、それは木造の、私の今の見方では、勉強して一級建築士をとればついでに木造もやれると。実際木造なんて、全く携わっていないにも関わらず、そうなるから、だから私は段々レベルが低下していくんだと思う。工業化されてしまうのは、それはそれで仕方ないとして。実際、自分の技術で物を作っていくという、こういうのはやはり、別世界ではないかなと思う。

だから、自分で建てるのは全部自分で設計しますけど、やはりいろんなところで書いとる人とぶつかったりしますけれど。やはり木造もそれなりに分かって書けるようになるまでは、5年、10年かかりますよ。そういうことで、育てると言う事に、もう65で何年やれるかわかりませんが、出来る限りがんばっていきたいと思っております。このあとスライドで、こうしておるといふのを見てもらうんですが、普通いつもこうやって、たちよってやる時には、大体職人が建築家の人達がほとんどなので、若い人もたくさんおるし、こんな事をしておる、こういう仕事もあるんだなというのを見ておいてください。やればおもしろいよ。自分で作るって。そういうことで、これからスライドやります。

先ほど、びっくりしたんですけど、おわらうのはいつもおったんで、あれはどこにああゆうの



おわらの祭り



軽い椅子

があったんですかね。ここで先ほど踊ったのが、この町内だったんです、多分。こういう所で、私も長年踊ってきました。これは女性の踊りですね。これは曳山と言って、300年以上前から伝統的に残ってきて、町内を曳きまわすと。これ、本当に建物に考えてみると、2階以上になるんです。それがものすごくコンパクトで、相当の人間が上に乗って、300年も曳き回して歩いた。しかし、壊れない。壊れなくて今までずっと来ておる。それはまあ、修理はしてきていますけれど。これが私の建築の原点なんです。今、金物材で固めるということしか頭がないんですが、本当はやっぱり木と木を組み合わせた固さというのが一番長持ちする秘訣なんです。200年、300年。私で再生したら、一番古いのが300年ぐらいの家が、更に再生する。さっきのダッシュ村の方は200年経っていました。

今、国のほうで言われているのが、200年住宅という言葉をおります。中身は、私はよく分かりませんが。この椅子は、同じ事なんです。今の曳山とおなじで、この椅子も木を見て組む。そうすると、この重さが1650グラムなんです。小指で持ち上がる。この座っとる子が学生で、115キロあるんです。なんか50年ぐらい前に、外国の建築家を作った、今でも売



学校（職藝学院）



木を繋ぐ

れとる、1700グラムか1750グラムの椅子があるんですよ。それを見たときに、「よし、俺はこれより軽いやつを作ってやる」といって、挑戦してこれを作ったんです。これも一切クギは使っていないし、ボンドも使っていない。接着したら壊れますよ。筋をいれたら壊れる。そういうのを建築の手法で組むと、こうもっておる。

これが私の教えている学校です。職藝学院です。これは一年生。一年生が最初、スタートぐらいですかね。今、<sup>のみ</sup>鑿を砥いだり、まず鑿を砥ぐ練習から始めます。その道具がとりあえず切れるようになったら、こういう継手とか仕口をやらせます。もう少し進むんですが、1学期でどこまでやるかと、それが出来ないと夏休みはないぞと。夏休みがない子がたくさんいます。

これは木を繋いだところですね。これは全部自分で墨つけをして、刻んで、一切私は口で教えるだけで、墨つけなんかは手伝いません。一回とりあえず全部、自分で図面を書かせて納得させて、それから作ります。これは今、家を建てる時の通し柱があって、その途中にあるところが仮に二階だと、二方からさす、三方からさすという時のどうやって止めるか、何で止めるかというのをやらせております。だからこういうのを今、組み立ててしまっ



屋根（繋いだ材料でつくる）

から入ってくると、例えば今ここに穴の中に栓の入る穴があるんですね。これを1回止めて、両方からさしてくると、その栓が当然見えなくなる。そうすると検査に来た時に「やぁ棟梁、これはどうして止まったんだ」と。「ええー、そんな事説明するのかい、説明する時は解体せんなんぜ」こうなって、こうなるとるんだと、一応口では説明しますけれど。これ一年生にやらせてるんですね。だから「こんなこと一年生に教えていることだよ」「そうかぁ、わしら一年生以下か」。こういうふうに栓で止めて、先ほどの下に掘ったところが、先の栓が、あの間へ入っていくという、見たら複雑かもしれんけど、そんな難しいもんでもない。こういうふうにして、家が建つんだよというのを、一人一つ課題で作らせます。それができる、ある程度できるようになったら、今度<sup>かな</sup>鉋に入ります。鑿が結構切れるようになった時点で、鉋になる。これが夏休み前ぐらいでクリアさせると。

女の子も結構います。ダッシュ村へ行っていた女の子が、私のこの学校の第一期生だったんですよ。今は行ってませんけど。これも全部試験です。厚みとか測る機械があって、幅とか、広さですよ。そういうのをクリアしないと合格しない。それでこういう一人ずつ繋いだ材料をもったいないから、こういうふうに次の課題に使うと。これは、今ちょうどここをやってる最中です、屋根の。これは本当は丸太でやるんですが、なかなか学生に丸太を一つ与えるというのも大変なので、角もので理屈が分かるように刻ませると。何が難しいかという、墨つけが一番難しい。刻むことより、墨つけのほうが難しい。例えば、皆さんも初めての人はそう思われるかも知れませんが、どんな曲がった木

でも、どうしてこんな上手く組めるのかなという基本って、これなんです。縦の垂直と水平だけで、全て寸法が出ると。なかなか口で言っても、理解させるのが大変です。これは最近法令化されたホールダウン金物というのがあります。私の建てている家は全部真壁で、中も外もみんな柱が見える、構造材が見えるので、金物なんか使えないんですよ。しかし法令化されたら使わなきゃ、ダメだろうと、それは分かると。でもそれ以上の強度があればいいだろうというので、これは本当の昔あった構法ですよ。ただ基礎があるというだけで、この下に柱を上げて土台をさすと、柱に。そのさした柱を、土台をアンカーで、ここへ柱が下がる。これを柱にさす。それで、アンカーボルトで押さえると。これでOKなんです、ホールダウン金物を使わなくても。

とりあえず強度実験をしてデータは作って提出せなならんで、そんなものは一回やったから、それでずっと通りますけれども。それはやっぱり大壁にしてしまえばなんでも出来るかも知れんけど、私の場合は全部真壁にして。なんで真壁にしてあるかという、200年、300年残ってる家を見ると、みんなそうなんです。しっかり木材が呼吸できる、乾燥、適度な湿気、しっかり吸うたり、吐いたりしておる間に長持ちをするというのでやっておるので、必要性としては真壁、ボルトなしという、ただアンカーボルトだけは使っております。今、国交省でこの伝統構法を残すための努力と、それで実験することになっております。ちょうど私の知り合いがそれを担当しているので、私にその図面をくれと。私は私なりに富山に根ざした構造があると、雪国で。しかも水分を含んだ重たい雪で。湿度が高い、雨が多い。そういうところに、地域性というのが必ずあるんですね。何で残ってきたかいうのを見れば、全部。だから例えば青森に来て家を見れば、ここの雪はどういう雪かと。やはり建築を見ると大抵分かります。構造を全部見せて、その上に板を張ったり、天井張ったりして、出来るだけ見せるようにしている。地元の杉の木を使う。

この建築を建てたのは、今から2年ほど、3年ほど前になるのかな。その時点で地元のテレビ局が、1年間私にずっと取材を続けて、この建物



荒壁

が仕上がるまで全部番組を作ったんですよ。その時の題名が200年住宅というタイトルで放送されたんです。その後から国が200年住宅言うたんで、俺のほうが早かったと。あとからだ、ちょっと言いにくかったかなという…。これは本当に卒業生がほとんどなんです。これは学校じゃなしに島崎工務店の仕事です。さし抜きで竹小舞で土壁、ほとんど自然素材でやっています。一応強度的なこともあってこの抜きが昔と違ってもうすごく大きいです。4寸ある抜きを使っています。こういった造りで、今その実験棟の平面図でこういう構造の模型を作っています。研究生一人、図面を書かせて、ちょうど4分の1だから結構でかい、4分の1だと結構強度も継手とか仕口もはっきりできるんで、なんとかそういったのも認めてもらえるように努力していきたいと。

これは荒壁1回塗ったということですね。こういう家を作る時には工期は絶対言えないんですよ。仕上がった時が工期と、最初に塗った土壁が乾かないと、裏の返しの壁が塗れないとか、それが終わった時点で、例えばそれが梅雨時だったりとかすると、時間が相当かかります。1ヶ月ぐらいあつという間に、壁乾かしている間に経ってしまいます。やっぱり仕上がるのは1年ぐらいかかりますね。この塗る壁土の、昔は稲の藁を切って、ある程度土になじませて腐らせて、柔らかくして使ってきた。今藁がないんですね。色々考えて実験しながらやってきたのが、この今入れています。炭化した炭です。土だけだとすごく割れる、粘着力が強いと割れる。調整しなくちゃダメだという事で、これがちょうど調整するのに都合のいい大きさといいますが、これはそして腐らないんですね。田んぼなんかの排水に埋



炭化した珪藻の炭（仕上がり）

めたりする位で、すごく長持ちする素材です。そういうのは、私も生れは農家なんで、子どもの時から色々手伝いをして、どういうもんかぐらいは少しは分かっている。それと吸音といいますが音を吸収する力もすごくあります。珪藻だけ一杯部屋に積んだところに行くと喋っても、中々聞こえないくらい音を吸収してしまう。乾いた後で見ると、このぶつぶつと見えるのが珪藻ですね。先ほどは下塗りの粗壁です。

次、中塗りの土壁を又ちょっと、同じ珪藻だとちょっと荒すぎるので、あれをどうやって細かくするかというと、炭化させるんです。農協で売っています。それを買ってきて、土に混ぜるとちょうどいい大きさといいますが、使い易さといいますが、これを中塗りに利用する。最近炭がなんか体にいいとか、すごくもてはやされておる、ちょうどまい具合に、健康のことを思ってやったわけではないんですが、使い勝手の事で始めた事が、偶然お客さんに喜んでもらえる。これが、炭化した珪藻の炭です。塗って乾いた状態なんです。これが又結構いい色をしておるんで、このまんま部屋の仕上がりにもしています。それはお客さんが漆喰を塗らずにこれだけにしておいてくれという注文が、そういうふう求められるというのは、やはり炭が体にいいからこうしたいと言われるのかなと。外部は別にそんな、炭化した炭は使いません。普通の珪藻はただなんですよ。無料であたるんですが、炭化したやつは少しだけ金を出さんならん。先ほど言った音を吸収してくれると、断熱効果もあるというので、床下の断熱材として、下に1回床捨て張りをして、こういうふうに珪藻を使っています。そうすると、ほとんど断熱材も自然素材となる。最近そういう自然素材を求



女の子（家具コース）

めるお客さんが増えてきたといいますか、やはりシックハウスの相談なんですよ。どうしてもそういうのでしてくれと。

皆、色々と質問があるんですが、ねずみが入るんじゃないですかとか、虫がわくんじゃないですかとか、色々言われますけど、もう20年近くやっておりますけれども、別にどうということもないんです。珞殻で殻なんですけど、珞の中の米を守るために、すごい難しい説明のできないような能力をもっておる。だから人間の世界では説明できないという話も聞いておるんですけど。それぐらいに言われる珞殻、ただこれはある人の話ですけど、これが一番下の土のところからはいっとると勘違いする人がおります。それは多分ダメだろうと。そりゃ水分もあがってくるだろうし、それはちょっとそれをやったらダメだと思う。やはり下は通気性がよくしておかないと。

そういう真壁の家を建てておると、その真壁に入れるサッシがない。しかし何か戸を入れにゃならんというので、自分で開発した木製サッシなんです。一応気密性とかの実験をして、特許もパスをして、ただ自分のところで使うだけしか作っていません。たとえ作っても売れないと思います。そういう家を建てておる人なら買うかもしれないけど。こういう今、建具コースの女の子が就職して実際に作っております。家具コースに女の子が3人います、4人います。大工1人と。こういうふうにおさまれば、本当に木の家に木のサッシ戸という、しっかりしております。

これは先ほどの家が段々仕上がってきたところですね。40坪ほどの家ですけど、2階も入れて45くらいあるんでしょうかな。この薪ストー



外観（仕上がった家）

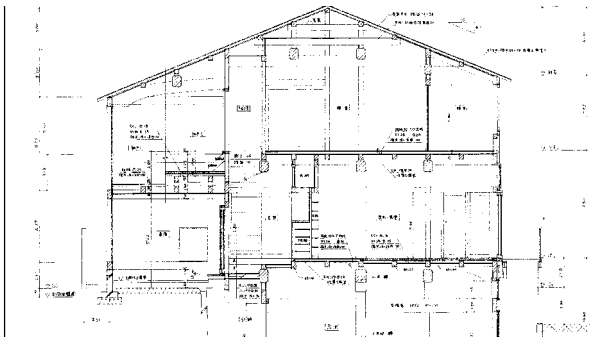


木組み

ブー一つです。家中暖房して、先ほどの吹き抜けから皆2階もあつたかくなるというので。これが外観です。ここに今たくさんこういう家があります。これは私はこの町内で八匠とって、八尾の匠という会を10社で作っております。

それで、私らが勝手に言っているんですが八尾型の住宅と、八尾型の団地を作ろうと。反対側・旧の町、先ほどのおわらの踊ったあ町は川を挟んで東側にある。ここは川を挟んで西側にもうひとつ町を作ろうという考えでこの団地を作った。30軒ぐらいですけど、ほとんど全国から見学に来られます。一応大臣賞もいただきました。それと街並み再生の大臣賞というのももらいました。これは、3階建てですよ。地元八尾出身で有名な女優さんの家なんです、これ。東京で建てたんです。これがまた一苦労したんです。私のやる伝統構法で、本当に東京の真ん中で建つのかと。本人にはとりあえず挑戦すると、俺は挑戦してみると、自分の木組みでしっかり組んで、それから構造計算もしてつけて、金物は一切使わないと。それは無理だろうよと、みんな、私自身も無理かなと思っただけなんですけど、半年かかったんです、色んなやりとりで。

で、最終的には今までの実績と私の経歴を出



木組みの図面



大黒柱

せと。それを出したらそのまま通ったんですね。だったら早く言ってくれば良いものを。でも、ここの区役所の指導課の人達は、多分こんなのは見れないだろうから、けちつけるでなく、勉強の為に見せてくれと、建てる時に。建てる間しばらく交替で来て見ておられました。絶対邪魔せんから是非見せてくれと。何でもここまで作ったかという、確認通すのになかなか図面だけでこの複雑に組んだ木組みというのは書きづらいんですね。自分で分かるように書いても相手に分からなきゃばどうにもならんと。それがどういうふうに組まれておるからこうだと。これを見ると仕口とかいうものが一切ないんです。だけど木を組むことで、いくらでもクリアできるよと。色々書いているんですが、これとこれが重なるんだとか、これも私が大体言ってます。その辺は楽です。全部自分がやらんでも、分かっているから書いてくれる。

ここが何かこういうふうに、落込んだところが、もともとの地面に建っておったんですが、そのまま利用して建てたという。だから上が大きくて下が小さい。でもここにこういう基礎というか、落ち込みのところにコンクリートがありますので、ここが本当はGLなんですね。こ



仕上がり

こが車庫なんですね。これが大黒柱。上大黒が8寸角で檜、下大黒が1尺角の檜と。その辺からスタートして後は杉でやっておりますけど。こういうのを組めるようになると本当に楽しいですよ。それが即見えるから、絶対手抜きが出来ませんし、いかにそのきれいに仕上がるかという。

これ一番困ったのは、全部こういうのに漆を塗って仕上げたんです。拭き漆で、べんがらと柿渋と拭き漆。東京に行って漆はぬれないんですよ、湿度が足りないんで。仕方ないから全部富山で塗って仕上げた。普通仕上げの漆は最後に、終わった時に塗るんですが、先に仕上げるといのは、組み立てるときにものすごい神経使うというか、物が大きいから普通の掛矢で叩いても動かない。普通の鋸でも出来ないというその大きなものをどうやって組むかと。しかも全部まわりは仕上がって傷つけられんと、どこを叩けばいいのか。これはもう仕上がった状態なんです。

こういう用意をして東京に運ぶ。東京へもその日に建てる分だけ持って行く。地面が足りない、置く場所が無い。これが一番大きい、富山でいう「わくのうち」という一つの核になる30畳ほどの大広間があるんです。その中心にかける、富山では「うしぱり」といって、下上(しもかみ)の大黒柱にかかるやつ。

これはここに天井板が入るんで、ここからここが仕上がって、こっちは仕上がってる。すべてこういうこの継手が、こういうのも全部書きだして、計算するんです。その計算って本当にあつとるのかよ。私は、全然計算出来んから、友達で大学の教授しているのにやってもらうんですが、その計算でそれでおうとるんのかと。



一番大きい梁

俺はこれで十分もつと、俺の計算は。だから自分が構造を書いて計算してもらっても、いや、これは強度が足らんからこうしなさいと言われた事ないですよ。だから大工さんの勘というのは、何割かその上をみておるんで。だから、そんな計算なんかどうでもいいと思うんですけど。

この人らが指導課の人達です。いちいち説明して休憩になると、エライのは見学に来るのに全部自転車なんですよ。自転車で現場まで……。これあっち向いているけどこれ彼女です。これ旦那さんです。この人はうちの学校の先生もしておる富山出身の設計家で東京で頑張っておる人です。この人に申請の方を任せたんす。ちょうどこれの申請がおりた日に、私が事例報告発表といいますか、東大のなんとか講堂でやる日におりたんす。これの写真とかもスライドで撮ったんですが、その日におりてこんかったら、やめておこうなと思っただけで、その日の午前中に東大に持ってきてくれたんです。彼が、さっきの人が。ああ、これで好きな事が言えるというので、やれやれ、やっと面目が保てたなど。そこには日本のおエライ様がいっぱいおる前でやるんですから……。

ただ、東京にはふさわしくない家です。これ富山にあってはじめて、なるほどなと思うんで、東京にあってなんでこんなでっかい材料がいるんだと、雪降るわけでもないし。そう言いながら、本人は八尾出身なんで、「私、何が何でもこういう家に住みたい」のそのの一点張りで、「まあ、いかりう」と言って、ただ外壁に関しては、やはり周りにちゃんとふさわしいように、言われるとおりに外壁はしてあります。大壁です。これが先ほどの一番大きい梁ですね。これは差鴨居でね。あれから又確認の申請が厳しくなっ



うちの全員

ているので、今やったらどうなるかわかりません。ただ、こんなの建てたらダメだというのは、誰が見たってこの近辺の人みんな、地震になったらこの家に逃げ込もうと、みんなそんな話をしておられる。素人の人が見ても、「ああ丈夫いな」ということがわかるという。

これが大体うちの全員でもないですけど。彼なんかは大学を出て日本のゼネコンにおって、10何年監督して、辞めてうちの学校へ入学したんです。なんと子ども3人、奥さんと全員引っ越してきて、卒業する時には「棟梁、もうお金なくなった。僕、行くところないですよ」ってうまく言って、うちに就職したんですよ。みんなそれぞれ2年間で何を考えて、もぐり込もうかということばかり考えておる。これは説明しなくてもいいですよ。これはこういう国交省とかナントカで色々金物決めておる人には見せておる。「あんた、こんなもの見たことなかるう」と。この薬、防腐処理してあるこの薬がすごいんですよ。この薬、相当強いから金物が負けるんですね。だから、5年刻みぐらいで調査して、絶対に賞味期限を言えと。

建てたときには、みんな新しい時には強いんですよ。ただ、どうなったらどうなるか。私らは大工をしておって、色んなものを見ますよね、解体したりして。だから、こういうのが気になってやったんです。これだって新聞の記事です。これも自分の自慢ばかりするかもしれないので、こういう例えばこれ20年経った家を解体して建て替えると。建て替えるのに、解体するとどうなるとるかというのは、こういう結露して、これ全部大壁なんすね。結露して下がっていったり、水分含んでまず下の木からダメになっていくと。こういうときに、どんな立派



木もすぐ腐る

な金物があるのと、豆腐にかすがいと。こういうことも絶対にありえないことじゃない、あることを写しておるんで、大工さんとこういう話をすると、そんなみんな分かっておると、いつも見ておって分かっておるといながら、やっぱりなかなかその表面に出て口で言おうとしないというの、ちょっとまずいような気がするんですよ。

これ、うちの学校ですけど、サイディングの防水がはげると、こうなって、この水分というのがほとんど抜けません。だから、これだと木もすぐ腐っていくよ、と。だから防水システムはしっかりやるべきだと思うんです。5年に1回ぐらいはやったらいいんじゃない？とは言っていますけど。ここで、うちの町内の公民館という所だったんですが、ある補助をいただいたことによって、コミュニティセンターと名前を替えなきゃならんといって新築をした。この新築をするにあたって、町内の私がこの建設委員長です。それはやっぱり金のこと心配になるし、町内で話をして「頼むから、俺が責任取るから、学生の教材にしてくれ」ということで、学校で建てる事にしました。このホールは、そんなに大きくないんです。バトミントンコートがやっととれるくらいのスペースですが、その梁をどうするかと。合掌にすればいいんですが、その屋根の形状からいって合掌にはならないんで、考えて学校でやらせるというのは、全く最初からクギは使わない、ボルトは使わないというのが原則なんで、「よし、そんなら何かを考えよう」と、自分で一晩かかって考えて、書いた結果こういうのを造ったんです。これは多分、世界にはないと思います。

これはかんざしというんですが、このかんざ



はつり作業



人数で勝負

し自身はありますよね。昔、あったんです。ボルトのない時代にこういう、先ほどの曳山なんかもこういうのを使ってあります。それを利用して梁を造った。両方丸太は、富山新港という港にそういう外国から木材が入ってくる。そこまで行って、ちょっと梁上げを欲しいというので、丸太のまがりもいいやつをわざわざ選びに見に行ってきた、持ってきて2面だけは製材で、あとこの上下は、学生にまさかりではつらせて、というのは少しアールをつけたやつで梁上げをつけたいというので、墨をうっておく。はつらせる。これをやるとる時に40人くらい、定員が40人ですが学生が40人くらい2年生がおって、40人に1本ずつ、例えば1日に1本ずつ、時間がかかってでもできたとしたら、40本できるんですよ。

そういうことを思うと、結構ね、スピードはあります。やはり人数で勝負という、先ほど荷重実験しておったんですよ。荷重実験をして強度を出してさらに構造計算もしてこれを使えるようにしたんです。大工さん、職人の人は色々わかると思う。上下全部、これを先ほど切り換えたこれですが、これ前ありになっとるんですよ、扇状に。だからスッと入れたら、それでとりあえずは持っておると。更にこのせいごを入



おわらの踊り

れて両方からかんざしで開かんようにする。これ雪国でないところだったらものすごく品のいい、優しい、面白い建築ができると思うんですけど。富山はそうもいかないので結構ごつい建物に。

この仕事をしている作業場自身、全部学生が造るんですよ。地元の学校が解体されるという時には、必ず県の方から連絡が来て材料をもらう。そのもらった材料で、こういう作業場5つぐらい建てております。この辺で大体こういう構造かと分かってもらえるかと、これがなくてもここだけでとりあえず1回抜けないようにしている、さらにこれで締める。これははしご型梁という名前をつけてヘーリン・・ていうんだったかなんか、そういう名前をつけておきました。いよいよ現地に組み立てが始まります。この時の2年生は夏休みは一切なかったんです。全部実習させた。でも誰も文句を言わなかった。これが学科だったら文句言うんですね。

それで先ほどのうちの町内も同じですけど、おわらの踊りがあり、それにふさわしい街並みを造っております。ですから（コミュニティセンターの）正面はそういう造り、街並みに合わせて造って、ここが2階の和室がステージになるんですよ、そのおわらを踊る。そうすることで、少々雨が降ってでも見る人が我慢さえしてくれれば、ここで踊りが見れると。この木組みも全部見せております。

すごくおわらに似合うように、これも自分が長い間、踊ったから、何をどうすればいいかという事は全部頭にあったから、全部自分で考えて、伝統構法の良さを学生に分からせるためにも造るということは、造ってみて実際に仕事をしておる時は、何をしておるか分からない。



コミュニティセンター

ただ組み立てていく事によって「はあーこうだったんだ」というのが、みんな納得して。この辺のところは、1年生です。1年生も手伝わして、これはここへ石膏を入れるんですね。こういう事も学生の数が多からこういう事が出来るんで、なかなか職人何人かでやるいうたら、こんな事までしておたら大変です。これは完成したあとで、こういう、これは全部格子戸を両方にかけてしまう。たくさん通っても見えます。

これはその中のホールから見とる映像です。中のホールからも2階で踊るとるのが見れるようになっている。この辺は島崎の職人が手伝って全部やりましたけど。そういう事を学校で今一生懸命教えております。是非こういう手仕事というのを残すために若い人に努力して欲しいなど。やはりつくるといのは、ものすごい楽しいものだと、それが先ほどの椅子をつくらうが、テーブルをつくらうが、何でもできるというのは非常に楽しい。何か質問があれば、時間は大丈夫ですか？

#### 参加者からの質疑と応答

司会 どなたかご質問等ございませんか。手をお挙げいただけますか。よろしくお願い致します。

質問者1 木材の乾燥というのはどういうふうになっているんですか。

島崎 いやあ、もう全然自然乾燥です。

質問者1 伐採してから何年とか、乾燥するところはないんですか。

島崎 ないです。

質問者1 じゃ、あとで割れは入る形になるんですか。

島崎 背割れはします、丸太でも。



質問者1 防虫剤とかは、まるっきり使っていない工法なんですか。

島崎 言うていいかどうかしらんけど、私、嫌いなんですよ。機械乾燥するということ。絶対あれね、いつか新しい時は強度ありますよ。繊維を守る油がほとんどなくなるんですよ、アレ。自然界でまた水分を吸わんわけにいかないんですよ。そうなった時に実験は誰もしないんですよ。なんでそれをいうかという、古い民家を解体した時に、本当に周りの白太のほうに朽ち果てて、木の形はないにしても中の油のあるところはものすごい力が残ってる。マッチ1本でもその油に火がつくくらい、ものによっては、だからいかにその材料の必要な油というのを、繊維を守るための油をとるのは、私は納得できない。

質問者1 そうしたら、さっきの木製の建具あるでしょう？木製のサッシね。あれだと何年かすると狂隙間はでませんか。

島崎 もうね、しっかりと戸しゃくりしたり、きっちりはあるように、枠付きで外側につけてあるんですよ。レールはアルミを使っている、鴨居と。それはアルミメーカーと相談して、これを使わせてくれというので許可をもらって用意してもらっている。だからほとんどサッシと同じです。

質問者1 私たちが考えるには生の木を使えば、必ず隙間が出てくるんですよ。

島崎 建具材はある程度乾燥したもので、建具材としてとっていますので。

質問者1 建具だけでなく、柱を使って真壁にしているから隙間は出てくると思うんですが。

島崎 ほとんど散りじゃくりして塗りこんでしまうんで。

質問者1 ありがとうございます。

島崎 皆さん、やっぱり本当にそれは大丈夫なんかと言われるけど、それは現場で技がいっぱいあるんですよ。例えば水切りにしても。それはやっぱり現物を見て、もしやりたいと思われる時は、あんなほどなと思うまで、実物を見られたほうが納得できると思います。

司会 よろしいでしょうか。あとはございませんか。はい、女性の方ですね。

質問者2 大工さんで伝統構法などの後継者を残すのも大変だと思うんですが、のこぎりや鑿や鉋などの道具を作る方という後継者は富山にはいらっしゃるんですか。

島崎 いやあ、今はいないですね。

質問者2 では、道具の方はどうしてますか。

島崎 今じゃ手打ちの道具なんてのはないですよ。ほとんどが機械化されたところでオートメーション的に作られておるといって、だから当たり外れも仕方ないし、でも道具の事はまだ大丈夫ですよ。使いこなす方がおらんようになってきたんで。今まで使っておった職人もとにかく今の工業化されたのに手を出すと、面倒くさくてもう1回元に戻りたくないらしいですよ。だからそれじゃアカンでないのじゃないかなと思う。やはり緊張感と苦しみながら造って出来た時の楽しみ、マラソンと同じですよ。何でこんな苦しい目に会わんならんのかと、でも完成したときに、ああやってよかったなと。そんなもんですよ。だから逆にやりがいもあるという。



た？それが一番心配で……。

司会 では、これで質問の方は締め切らせていただきます。では皆様、島崎様にどうぞ大きな拍手をお願い致します。島崎様には大変貴重なご講演をいただきました。ありがとうございました。

質問者2 ありがとうございます。

質問者3 土壁にすさの代わりに珪殻を入れましたけど、珪殻の方が強度がいいということですか。

島崎 強度ではなしに、粘着力の調整というか、粘土だけだと強すぎて、その土、その土の性質ありますよ。でも昔は砂を入れたりとか、藁すさというのはつなぎですからね、調整ではないんですが、珪殻は両方を兼ねて出来るんで、小さい事は小さいですけども。

質問者3 珪殻だけでいいんですか。

島崎 珪殻とここに出とらんかったんですが、もう一つ使っているものがあるんですよ、つなぎになるのを。

質問者3 秘密のもの？

島崎 (笑) えーとですね。シュレッターの紙ありますよね。いらん紙、サーとやる。あれが結構強度があるんです。濡れとる、乾いたら強度が出てくる。それをある時期に「これなんか使えんかなあ」と思うた時に、「よし、これ藁の変わりに使ってみようかな」というので、ただ、ここには見せんかったけど。

質問者3 秘密を公開してくれてありがとうございます。

島崎 (笑) 八戸工業から一人、一年生来とる。あの学校から二人ぐらい来てるかな。その高校の子、誰か、おる？来とったら、年が一つ違うだけだから知っとるかなと思って。

司会者 皆様、他にご質問ございませんでしょうか。

島崎 あの、しゃべっていることが分かりまし

# パネルディスカッション

---

# テーマ / すまい職人の現状と課題

## ～ すまい職人が輝くために～

### コーディネーター

北原 啓司氏

【きたはら けいじ】



(弘前大学教育学部副学部長)

昭和31年伊勢市生まれ。弘前大学教育学部副学部長・大学院地域社会研究科教授。専門は都市計画、コミュニティデザイン。東北大学大学院工学研究科博士課程中退後、昭和60年から東北大学工学部建築学科助手、平成6年より弘前大学教育学部助教授、平成15年同教授。著書に、まちづくりの科学(編著、鹿島出版会) まちづくり教科書第6巻「まちづくり学習」(編著、丸善)等がある。1級建築士、博士(工学)。青森県住宅政策検討委員会委員長、すまい職人きらいアップ委員会委員長などを務める。

### パネリスト

二川目 麻実氏

【ふたかめ まみ】



(有限会社前田塗装：塗装工)

昭和61年百石町生まれ。平成16年有限会社前田塗装に入社、同年より2年間、三沢職業能力開発校建築塗装科にて職業訓練を受ける。2級建築塗装技能士。平成19年9月に全国建築塗装技能競技大会特別賞受賞。子供のころ、建築現場を見て面白そうと感じたのがきっかけで塗装工となる。「現場では女性も男性もない。お客様に喜んでもらえる仕事がしたい」と語る。

齋藤 義則氏

【さいとう よしのり】



(丸喜(株)齋藤組代表取締役社長)

昭和22年青森市生まれ。中央工学校卒、松浦弾デザイン研究所、大成建設設計部を経て丸喜(株)齋藤組に入社、現在に至る。青森市国際交流ハウス、国際芸術センター四季のアーケードの新築や三内丸山遺跡住居復元などに携わる。1級建築士。地元のヒバと職人芸を生かした、健康的で美しく使いやすい住まいづくりをモットーとしている。

越山 成憲氏

【こしやま しげのり】



(弘前高等技術専門学校訓練第二課長)

昭和26年岩崎村生まれ。弘前職業訓練所建築大工科終了後、工務店で建築大工、現場監督等をしながら、弘前工業高等学校、中央工学校で建築を学ぶ。昭和53年木造技術専門校の職業訓練指導員となり、以後、職業能力開発課、青森、弘前、むつ、木造の高等技術専門校で職業訓練業務に携わり、数多くの建築大工を育成してきた。1級建築大工技能士、2級建築士。(社)青森県建築士会中弘支部理事、すまい職人きらいアップ委員会委員などを務める。

### コメンテーター

島崎 英雄氏

【しまざき ひでお】



(島崎工務店棟梁・職藝学院建築職藝科(建築コース)オーバーマイスター)

昭和18年富山県八尾町生まれ。昭和34年棟梁坂本國一氏に弟子入り。昭和48年島崎工務店を設立、現在に至る。また、平成8年4月に設立された大工と庭師を養成する富山の専門学校「職藝学院」建築職藝科のオーバーマイスターとして伝統構法を伝えている。多くの「民家移築古材再生復元」に携わり、富山県建築百選入選、日本伝統工芸富山展入選、第5回工務店の家コンテスト純和風優秀賞受賞など数々の賞を受賞。国立高岡短大産業工芸学科木工芸専攻「公開講座」特別講師、八尾町HOPE計画推進委員などを歴任。NHK「未来派宣言」出演、日本テレビ「ザ!鉄腕!DASH!!」の「DASH村」の古民家再生やTOKIOの大工修行に携わるなど、多方面で活躍中。



司会 お待たせ致しました。それではお時間になりましたので、パネルディスカッションを始めさせていただきます。「すまい職人の現状と課題」～すまい職人が輝くために～をテーマにお話をいただきます。それではご参加の皆様をご紹介申し上げます。コーディネーターは弘前大学教育学部副学部長でいらっしゃいます北原啓司様にお務めいただきます。よろしくお願ひ致します。コメントーターは先ほど基調講演をお務めいただきました島崎工務店棟梁・島崎英雄様にお務めいただきます。よろしくお願ひ致します。それではパネリストの皆様をご紹介申し上げます。有限会社前田塗装・塗装工二川目麻美様でございます。丸喜株式会社齋藤組齋藤義則様でございます。齋藤様でございますが、9月1日から代表取締役社長になっております。よろしくお願ひ致します。続きまして越山成憲様でございます。弘前高等技術専門学校訓練第二課長でいらっしゃいます。よろしくお願ひ致します。それではこの後は北原コーディネーターお願ひ致します。

北原 それではここから一時間半ほどになりますけど、パネルディスカッションを進めさせていただきます。この討論のタイトルは

「すまい職人の現状と課題」「すまい職人が輝くために」という副題がついています。今日のタイトルはすまい職人きらりアップフォーラムという形でして、実は青森県ではこのすまいに関わる職人の方々が、きらきらするような、そういうふうな形で安心なすまいを作っていこうという動きをしているわけですが、その中ですまいに関わる職人の皆さんが、現実的にはどういう状況にあるのか、あるいはきらりアップといっているけれども、どういうふうな部分をきらりアップしていくべきなのか。

こんな話を実際にその先頭でがんばっている方々、今日はパネリストの方を見ていただくと、お1人は実際に若くしてこういった立場に飛び込んできて、いま頑張っている女性の方と、もう1人の齋藤さんの場合は会社を経営しながら、そういった職人といった方々と一緒に仕事をつくるそれを経営している方、最後の越山さんは弘前のほうで職業訓練の学びの場所で、実際に育てる役目をしていらっしゃる方と三者三様の立場で、それぞれの今「すまい職人の現状と課題」についてお話いただきます。

そして先ほど貴重なお話をいただきました島崎さんには、島崎さん自身も島崎工務店の棟梁であ



北原啓司氏

り、なお且つ先ほどの肩書きの話にもありましたように富山県でやっている職藝学院という育てる役目の所にもいらっしゃる。そういう形で、今どう

いうふうにして若い人達に学んでもらいながら一つのものをつくる、住宅をつくっていく、すまいをつくっていくというこの技術や形、生業を次の時代にどうつなげていくかということについて、いくつかコメントをいただきたいと思っていました。

では早速、今日のパネルディスカッションに入っていきます。最初は三人のパネリストの方々にそれぞれお話をいただき、そのあと少しそれをお聞きになった上で、島崎さんからコメントをいただきながら、少し意見交換なんかをしていきたいと思っております。では最初は二川目さんからいきなさいと思います。肩書きのほうにもあると思いますが、二川目さんは今、三沢のほうで塗装のお仕事をやっていらっしゃいます。実はここにもありますように平成19年9月に全国建築塗装技能競技大会で特別賞を受賞されております。県内女性初の建築塗装技能士の2級も取得されているということで、若手の職人の立場から、実際に、えっ、何故そういうふうな仕事をしようと思ったんだろうか、とか今日は若い方もいらっしゃいますが、どういうことで、こういう仕事を今頑張っているのか、将来どんな事を考えているのかみたいなことをいくつか二川目さんにお話いただくように、こちらから宿題を出しましたので、それについて少しずつ答えていただくような形で、まず最初のプレゼンを行っていただきたいと思いま

す。では、二川目さんよろしくお願ひします。

二川目 私が入ったわけは、最初からなりたくて入ったというわけでも本当はなくて、小学校、中学校あたりから、親から手には職をつけなさい、手に職をつけなさいとすごくうるさく言われて育ちました。そして県立百石高校に入り商業科を卒業したんですけども、授業を通して私にはちょっと合わない仕事かもしれない。就職どうしようと思って、求人票を見たんですね。そして父親もそうだし親戚が建設関係に携わっている方が多かったので、そしてたまたま求人票に今の入っている会社があったので、ここで頑張ってみようかなと思って、親に相談しました。そうしたら、「3年間は辛くても頑張りなさい」と言われたので、それを覚悟して入社しました。

北原 今のお話ですと、入られてとにかく「手には職をつけなさい」と「3年間は頑張り」と言われて入ったわけですけど、入ったからといってそう簡単に特別賞はもらえないと思いますがね。そのあとの色々入った、どういうお仕事をするかも含めて、全く皆目見当もつかないで入られた分もあると思うんですけど、その後からのお話を少し、お話いただけますか。

二川目 高校を卒業するまでは、ペンキ屋って、壁とか普通に塗るんだなって簡単にしか考えていなかったんですけども、実際入って色んな資格が取れる事も知ったし、色んな人との関係も築いていけたり、仕事でも楽な事ではないけれども、今、目の前にあることを少しずつやりなさいと言われて、みんなの応援もたくさんもらってフォローもしてもらいながら、つらい事もたくさんあったけれども、ここまで来れました。

北原 さっきのお話ですと、普通高校で商業のコースにいらしゃったということで、高校の時には全く今のお仕事に関係ある技術とか、知識みたいな事は学んでいらしゃらないわけですから、入ってから色々助けてくださるような環境に入ったとはいえ、その技術というかゼロからのスタートですよ。やっぱりさっき島崎さんも職

藝学院というそういう学びの場所を今持っているんですけど、こういうのってどこで学んだんですか、その技術というのは。職場だけなんですか？

二川目 そうですね。仕事をしてその2年間、見習い期間に能力開発訓練校に入りまして、そこで講師の方から技術も教えてもらって、あとは学科も教えてもらいました。

北原 それは働き、見習いをしながら、通える環境なんですか？

二川目 はい、そうです。週に何回か2年間通いまして、実技と学科を習いました。

北原 今日は多分こういう島崎さんのお話を聴こうと思って、そういう今青森県の中でそういうことが学べる環境があることを知らない方もいらっしゃると思うので、ちょっと事実確認にお話を聞きたいんですけど。今、二川目さんが通っていたその職業能力開発校かな、これは三沢にあったということなんですけども、これは青森県内にいくつかそういう形で存在している機関なんですよ。

二川目 はい、そうです。

北原 それは夜いくんですか、昼間いくんですか？

二川目 朝8時半、9時からスタートしまして、4時、5時に終了です。その間は仕事は休むというか.....。

北原 職業のついた会社の方で、行っておいでという形で出させていただいた。

二川目 はい、そうです。

北原 ああ、そうですか。それは2年間で？

二川目 はい、そうです。

北原 それを卒業されてからは、とにかく一本、今お勤めの前田塗装の方で、あとは現場の方でどんどん学んでいくと。

二川目 はい、そうです。

北原 そうですね、じゃ少しそうやって学んだ後に、今さっきお話しで紹介しましたように、全国的な賞もいただいているわけですけども、と

は言え、それまでの間に色々うまくいったこともあるでしょうし、様々な失敗も繰り返していると思いますけれども、何か少しそういう形で今、頭に残っていることとかありますか。

二川目 うーん、辛かった事や失敗した事に対しては先輩たちのフォローもあったり、アドバイスももらったりもして、その全国競技大会の中には塗装以外の仕事もちょっと入ったんですね。左官の作業もあったんですよ。そのために知り合いの左官屋さんをお願いしまして、仕事の終わった後に自分の家で左官をちょっと習ったりもしてやりましたね。

北原 今日はその職場の先輩たちも見に来ていらっしゃるんですか。

二川目 はい、今日は社長と後輩が.....。

北原 そういうことかなと思って聞いてみましたけど。えーと、ちょっと違う話を聞きますけど。多分高校生で、学校に通ってる頃に、今、塗装とか左官とかってそういう職種がある事すら、あまり意識の中になかったでしょう？

二川目 なかったです。

北原 実際に入られてそういう職業を自分で目の当たりにして、そして今度は自分がその方々とおつき合いしながら、仕事をしていくという中で、簡単に職人という言い方しますけれども、色々な職種があると思うんですけども、こういう職種に対して実際に今現場に入って、どういう仕事だみたいな、自分で今どういうふうにとらえていらっしゃるんですか？そういう魅力とありますか。あるいは昔こう、見てみるとこんなに違うんだみたい



二川目麻実氏

なことで、見てきて驚いた事とか、何かありますか。

二川目 職人とはまだ見習工の時には遠い存在だったんですね。先輩達を見ていて、こういうふうになれるのかなと、すごい不安な時もあった、すごい足を引っ張った時もありました。その時にちょっと「辞めようかな」とくじけそうな時もありました。でもお父さんと話したときに「3年間は絶対辛くてもやりとおせ」と。で、3年経ってから、やっぱり考え方が変わりましたね。

北原 それはどんなふうになりました？

二川目 ひとつの現場を最初から終わりまでやった時、お客さんに喜んでもらえたりとか、そこで携わっていた電気屋さんとか大工さんとか、そういう人とも会えたりするののも一つの楽しみになりました。

北原 仕事で関わっている人とですか。

二川目 はい、そうです。

北原 最初はそんなに楽しみなんて思う余裕はなかったですか。

二川目 ないです。

北原 会うのが嫌だったという感じがありますよね、きっとね。将来的な展望としてね、今、これからこんな覚えたいとか、あるいはこんなふうな仕事をしていけたらなあとかいう、あなた自身が考えていらっしやる夢というか.....

二川目 夢。私は県内から出たことがないって言ったんですけども、これから県外にもちょっと足を伸ばして、どういう事が今、最先端なのか、そういうのも勉強してそれをまた地元を持って帰って、それでみんなともものづくり最先端のいいものも作っていききたいなと思っています。

北原 もっといろんな事を外から吸収してきて.....。今日はこの場というのは、目の前に若い二川目さんよりも下の世代の方もいらっしやるし、もう一つは県のこういう関係の、建築とかに関わるような様々な職能に関係する方々とか、あるいは行政の方々とかいらっしやるので、この業界というか、業者の方とかね、若い人間としてこの仕

事に入って来て、これからこの場でとにかく頑張ろうと思うときに、もうちょっとこういうところがいいと、自分も働き易いし、もっとみんなも一緒にやろうと言えるんだけどみたいな、この場だけで言っても何も怒られませんから、何か日頃困っているなと思っていることとか、もしあったらお話聞きたいんですけど、どうでしょうね。

二川目 うーん、私たちと同じ世代で、こういう建築とか、ちょっと関係なく全部仕事についている人なんですけど、私の後輩で、又違う業種なんですけども、仕事に対しての意欲があんまり向上心がない感じがあったりもするんですね。それで、どうして仕事が給料もらえればいいのかというふうになるかという話をしたときに、やっぱり達成感もないし、会社の社内環境もよくない。先輩も冷たいとか、そういうのもたまにあったりもするということがあるんですよ。その時に先輩が、どれくらい年下の後輩をフォローできるか、悩みを聞いてあげるかとか、そういうフォローとか悩みを聞いてアドバイスしてあげるのも一つの長続きさせることで、ちゃんとした職人に育てるものなんじゃないかなと思いました。

北原 そういうコミュニケーションをうまく... ..そういう意味では二川目さんはいい環境に入ったと.....。

二川目 出来るだけそれなりに聞いてあげたいと。

北原 二川目さん自身は、それを聞いてもらえるような先輩が今職場にいるということですね。

二川目 はい、います。

北原 なるほどね。若い人達、例えば今そういう職業を少し関わりたいなと思って、高校を出てから、今日も来ていらっしやいますけれど。そういう職業訓練に関わるような学校にいらっしやる方なんかには、もし後輩たちにメッセージがあるとすると、どうでしょう？

二川目 一番最初は、やっぱり訓練校に入っているという事は見習い、一人前ではないじゃないですか。その前にそういうふうには辞めるとか、嫌

だ、辛いとか、そういう前に先輩たちに相談して、あとは耐えるというか、どうしたら続けていけるか、どうしたらちゃんと職人に近づけるか、そういうのをすごく熱く自分で悩んで欲しいと思います。考えて欲しい。

北原 熱く自分で悩んで欲しいと、そうですね。分かりました。島崎さん、今お話を聞いていましたけれど、彼女なんかの話を聞いて、すごく分かり易い事だと思うんですけど、実際にどうですか、少し.....。

島崎 その手に職をつけなさい、と言ったのはお父さんなのか、お母さんなのか。

二川目 両方です。

島崎 両方なの、えらいね。私の時代もそうだった。手に職をつければ一生食いっぱぐれはないぞと、何とか食べていけるというので、私もその道にいれたというか。確かにそれは、お金とか財産とかは時にして、なんかでなくなるということもあるけども、身につけた技術というのは、絶対金で売れるものでもないし、人に取られる心配も全くない。努力すればするだけ自分の技術もあがって、しかもその仕事が楽しくなっていくと、その繰り返しで、勉強は一生勉強だけど、非常にいい選択ではなかったかなと思うね。今は男女関係なしに、色んな職人が育ってきておるんで、非常に私もそういうのを久しぶりに聞いて、勇気づけられたというか、がんばって下さい。

二川目 ありがとうございます。

北原 ありがとうございます。では二川目さんの一回戦はこれで無事終了という事で、少し待機していただきたいと思います。ありがとうございます。えー、ちょっと変則的に二川目さんとは僕とこうやってインタビューする形でやりましたけど、ここからはパネルディスカッションばく、今度は僕は口を挟みませんので、思う存分しゃべっていただくという事で、次は齋藤さんをお願いしたいと思います。齋藤さんは今日の立場からいうと、多くの大工さんを含め職人さんをかかえて育成している建設会社の経営者として、経営者の

立場から今のこの業界の中での職人さんたちがやっていける環境、あるいはこの業界自体がその人達を伸ばしていったり、高めていったりすることが



齋藤義則氏

環境にあるのかみたいな事を含めて、今、ここにいらっしゃる職人を目指している方々へのメッセージも含めて、少しお話をいただきたいと思います。では、よろしくお願ひします。

齋藤 齋藤です。建築という仕事は、鳶とか土工さん、大工さん、左官屋さん、建具屋さん、板金屋さん、塗装屋さん、その他色んな職種の技術の集団で、1軒の建築が出来上がるわけですよ。当然、その前段階には設計したり、調査したり、みんな職人なんです。その職人が一人一人、自分の技術というか長年勉強してきたり研究したり、それがやっぱりこれでいいという判断の上で建ったのが一つの成果になるのではないかと。それぞれ、最近こう思うんですが、プレハブとか色んなのが、すぐ3日、4日、1週間という段階で出来ちゃうということがあります。そういうことがありますと、これ技術なのか、職人でなくて工場で作ったものを組み立てるのも技術には違いないし、職人の世界ではないんじゃないかなと思うところが、最近特に思っております。色んな関東、関西の方からどんどん、どんどん安い住宅と言え失礼ですけども、ナントカホーム、ナントカホームと入って来て、職人の世界が何となく脅かされてると、これはひいては職人が育たない環境にあるんじゃないかなと感じます。

先ほど島崎さんも無垢の柱、乾燥あまりしなくても大丈夫だよと、心強いお言葉を聞いたんです



白

が、実際、お客さんを目の前にしますと、集成材でないともうだめだよと、お客さん。それから今の行政の方でもそうなんです、やはり集成材でないと許可が取れないとか、割れば法律問題にもなりかねないと、色んな問題がございます。この職人を取り巻く世界というんです、片一方では大丈夫なように行政の方に働きかけてやらせれば助かるんですが、そういう意味でも私共建築を取り巻く環境は、段々シビアな狭い状態においていられる。

しかし、そこで何か光明があるのは、いま県産材とか各地方、地方で地産地消という言葉がありますが、それにちゃんと県産のものを使って、また産業をもう少し大きく育てようじゃないかということ、行政にもお願いするところでもあるし、それがひいては職人の盛り上がりにもどんどん、どんどん出てくるのではないかなと思います。技術というのは、やはり難しいところに走ったり、先ほど島崎さんのように梁を見せたり、柱を見せたりするということは、一つ一つの仕口、または塗装ありましたよね、拭き漆とかそういう技術にしても、又それを養生してもきれいだなと思うんですが、そういう技術が、あぁこういう仕事をしたんだな、あぁいう仕事をしたんだな、という誇りが非常に持てれば職人として、一生涯のうちであんな仕事をしたよな、こういう仕事をしたよな、というのが残る、それが非常に喜びであると思います。

私共の仕事としても、安藤さんの雪の回廊とか大きな国際交流ハウスを木造でかなり大きなのを

やったりとかして、あの時あぁいう苦労をしたなと、あれも苦労だったな、又三内丸山の縄文の掘っ立て小屋を造った時も、あれも非常に最初、苦労をしたっけな。何にも資料がないものですから、八工大の高嶋先生といろいろ、丸太と丸太を結ぶ藤の縄を作るのにも、どうやったらいいのか、いろいろ工夫しながらやったり。あれも職人がいたと。職人ではなくて、むしろそれは縄を縛うんですから百姓なんですけれども、そういうふうな、うちの親父も大工だったものですから、非常にその辺はよく理解してくれていまして、大変助かったなと思っております。

そういう具合で、職人は難しい仕事をあずければ、もしくは難しい仕事を皆さんの方で色んなのを注文してもらえよう、昔は難しくなかったのですが、最近は難しいと感じる。その昔ながらの伝統のある構法何なりを、仕事に慣れば業界としてもそれなりに何となく残っていくのではないかなというところがあります。それは、我々業界もやはり陳情と言えませんがお願いして、そういうふうな方向に少しでも仕事を増やしていけるようになれば、明日のためにもなるのかなと。はたまた若い人達がこの業界に入って仕事を楽しみに捉えるようになってくれればいいかなと思っております。以上です。

北原 齋藤さんの会社は、二川目さんみたいな若い例えば女性とか、お勤めになられてるんですか。

齋藤 一番若いので26、27ぐらいだと思んですが。うちの会社は工業高校の生徒が入ってきた時は、最初監督で入ってくるんですが、大体2年ぐらいは大工さんの見習いとか、そういうふうな片付けとかですね、色んな事をさせて職人の気持ちというのは、どんなもんなんだろうという経験をさせます。そして2年ぐらいしてから、大体掃除、片付けとか食事の手元をやれば、飽きてくるもんですから、次の段階として選択、監督のコースで行くか、もしくは職人やりたいか。それで、自分の性格としては大工さんをやりたいという人

は大工さん、監督をやりたいという人は監督にいくと。自分でそこで選択されるものですから、やっぱり大工さんやりたいという人はそれなりにしっかりやっていけると。

うちは建具屋さんもいるもんですから、建具の方も若いうちから仕込んでやると、組み立て工じゃなくて多能工を育てたい。そうするとやはり、前にも言ったようにかなり長い70くらいまでは平気で働きますから65の定年を過ぎてても働くということで、なかなか辞めないということもあるのですが、若い人は若い人でまた入れていかなければいけないけれども、やはり絶対量が足らなくなっている。組み立ての仕事だったら早いんですけども、やはりじっくり家を造るという仕事が、もっと欲しいなと思うところがございます。

北原 はい、ありがとうございました。これは齋藤さんの会社だけじゃなくて、県内の齋藤さんのような建設の会社の場合には、若い人達が新入社員として入ってくるペースというかスパンというのは、大体今、どんな感じで入ってくるんですか。

齋藤 最近はですね、若い人がほとんど入ってこないというよりも、予算が段々厳しくなっている折、即戦力を求めるようになりまして、今、大工さんがあちこち倒産している状況なんですよ。そういうことでもあるし、どうしても慣れている大工さんに、応援してもらおうとかそういう状況でございますが、ただ、うちの大工さんも年いってから、辞めていかざるを得ない。70過ぎとかになれば、やっぱり補充するしかないもんですから、その時には即戦力、もう少し仕事さえあれば若い人を定期的にとっていける。だから島崎さんのような学校の人達のシステムというのは、本当にうらやましいなと思っております。

北原 さっき、それで職人が育てられない環境が一番問題だとおっしゃっていたんですね。

齋藤 職人を育てるには、仕事がないと出来ません。

北原 余裕が出来ませんものね。島崎さんのと

ころというのは、若い方が島崎さんの工務店のほうに、今どれくらいいらっしゃるんですか。

島崎 現在、卒業生が10人くらいいます。ただ、女性に限ってとりあえず結婚して子供できると1回辞めるんですよ。それは、仕方ないかな。でも1番最初におった子が、うちの職人と結婚して子供が2人できて、手がかからんようになって、再度就職しなおして、又家具作りをしておりますけれど。すぐまたそういうところへ帰れるというのも、手に職がしっかりついておる、技が技術があるというので、ただ、卒業すると、みんな入りたいというのは困るんです。そうじゃない、俺が教えた事をどこかで修業しろと。俺もいろんな事をやって、最終的に自分でそういう仕事を求める時は、自分でやるしかないだろう、それが1番楽しいんだという気持ちで学生にはそういう話をしております。

北原 では、3人目ですけど、そういう学生という今、言葉が出ましたけれど、学ぶ環境に今、携わっていらっちゃって、学ぶ環境で色々と生徒さんを指導していらっちゃる、その人達がいわゆる職能を持つ業界に出口として、うまく入っていてももらえればいいわけですけども、その環境に今あって色々と苦勞をなさっている越山先生のほうから、実際に今どんな感じでやっていらっしゃるのか、あるいはその後就職を希望する学生たちがそういう環境にいけているのか、いろんなリアルなお話をお聞きしたいと思います。何か、今日は学校の内容を紹介するDVDも持っていらっしゃるということで、併せてでは、よろしくお願い致します。

越山 先に学校紹介の、先般ですね、テレビで放映した部分を皆さんに紹介してから始めたいと思います。よろしく申し上げます。

(DVD流れる)

さあ、来年は就職という若い諸君！技術を身につけると大変有利です。そのためには職業能力開発校がありますよ。県立職業能力開発校は、青森、弘前、八戸、むつにあります。今日は弘前高等技



越山成憲氏

術専門校に一日入学して、どんな事を学べるか、そして本当に就職に有利なのかレポートします。ここでは、自動車システム工学科。どうですか、結構にあってま

すよね。こちらの学科は中々の人気で競争率も高いそうなんです。(レポーター)

「自動車全般の勉強と2級自動車整備士の養成を行っております。皆さんやる気があって、非常にがんばっています。」「私がこの学校を選んだ理由は、まず私が高校生の時に、この学校の評判がすごくよくて、国家資格の2級自動車整備士を取得できること以外にも、就職に役立つ様々な資格がとれるということで、この学校を選びました。」

こちらは建築システム工学科。つまりは快適住宅のアーティストなどを目指すわけですね。こんどはどうですか。けっこうしっかり行ってませんか。(レポーター)

「1年生では3級建築大工技能士、2年生では2級建築大工技能士取得を目指しています。技能五輪全国大会青森県予選会の出場を目指しています。」「子どもの時の建築関係の夢が、私の言う志望、資料を見てとても興味のわくところだと思い、進んできました。」

高卒以上の方を対象にした県立職業能力開発校は弘前市のほかに青森と八戸にあり、訓練期間はいずれも2年で、昨年の修了生の就職率は99.3%なんです。また、むつ高等技術専門校は、中卒以上が対象で、木造建築科があります。それでは職業能力開発校の修了生、就職先では、どんな様子なんでしょうか。職場に伺ってみましょう。(レポーター)

「資格の勉強もいっぱいしたことあって、ここに就職して、そして周りの人達の助けもありまして、とても為になったと思います。」(卒業生)

「2級の資格を持ってきていただいておりますので、仕事の方でも頑張らせていただいております。」(職場の人)

「学校では、本当の基礎を学んで、今は実際の現場に出てみてそれに役立っています。夢ですか？自分の家を設計して自分で建てたいです。」(卒業生)

「やっぱり知識をある程度身につけてきていますので、その辺現場ですぐ即戦力として、働いてもらえるんで、助かっております。」(職場の人)

職業能力開発校の評判はいいようですねえ。来年度の募集要項をお知らせしておきましょう。高卒者等を対象にした願書受付は、推薦が9月1日から一般は10月1日からとなっております。詳しくは希望する各職業能力開発校にお問い合わせ下さい。一日体験入学でしたが、ものづくりを学ぶというのは楽しいものですね。進学を選択肢に県の職業能力開発校を考えてみてはいかがでしょうか。(DVD終わる)

今、紹介しましたように青森県が設置している職業能力開発施設です。いずれにしても高卒2年のコースと、皆さんのお手元にパンフレットが入っていますけれども、主としてすまいづくりの職人をつくるということで、青森、弘前、八戸、むつ。むつについては中卒2年コースというふうなことになりますけれども、そこではどういうふうなことをやるかということ、齋藤さんの工務店さんの方に就職をさせるとか、そういうふうなことで位置づけをして、1年間については大工道具の手入れ、作り方等を主として行う。更にはその大工道具を使って、墨つけとか加工とか木造の住宅を建てるためのそういうふうなことを日々練習している。更には道具の中では一番面倒と言われるんですけども、カンナの整備の仕方、カンナの薄さを削る競技大会を実施したりですね、学生に楽しみを与えながら日々訓練をしている。カンナの薄さ

というのは、皆さんの髪の毛ありますけど、1000分の80ミクロンから70ミクロンぐらいです。そうすればカンナ屑の薄さと言えどどのくらいかと言うと、その3分の1位。20ミクロンとか、25ミクロンとかそういうふうなところまで、薄さを調整しながら、もちろんただ手でするだけでなく、カンナの台があるわけですけど、その台のなおしかたとか、そういうふうな建築大工の基本的な事をずっとやってきている。

更には、一年生の後半になるんですが、技能五輪の全国大会の青森県予選に参加させております。全員です。お蔭様で今の一年生は19名入っていますけれども、19名全員、技能五輪の予選大会に参加しています。この課題については、建築大工の職人が3年ぐらい実務経験を積んだ方が受験できるということで、非常にハードな部分です。競技時間についても6時間、そして30分延長はあるんですが、6時間30分過ぎると打ち切りということで採点の対象にならない。というふうなことで、とにかく時間に制約される競技に参加させています。もちろんその工程のなかには、図面を書いたり、道具で材料を削ったりというふうなことを実施して、1年の時にそれをクリアするように学生に指導をしている。2年の時にはそのクリアした分をもって、2級技能検定の学科試験にチャレンジするというので、2年間の入っている間に2級技能士の資格を取得させたいという事で、カリキュラムを調整しながら実施している。

更には2年生の前半になるんですが、校外に出て実際の建物、木造建築物ですが、大きな住宅とかそういうところまではいきませんが、物置とか車庫その辺の程度、図面を書きながら材料拾いをし、更にみんなで墨つけをして校外実習ということで、実習に取り組んでいるというふうなことです。そして2年生の後半になれば1級の課題にもチャレンジさせるということで、2年間の基礎的な部分を訓練している施設です。

私自身もですね、中学校終わって、訓練施設に1年間入って、それから建築大工の見習いとして

働き、更には現場監督を介しながら、夜は勉強して今現在に至っているというふうなことです。それで長いもので、35年間くらい今の仕事として携わってきました。学生については550名位修了生。550名全部建築大工をやっていたらいいんですが、途中で進路を変更している修了生もおります。ただ、私は常に言っているんですが、せっかく2年間または1年間、勉強した部分を無駄にしない仕事についていただければと、とにかく建築の関連の部分に、建築大工が面倒であれば、又それに関わる、せっかく勉強した部分をいづらかでも生かせる職場を見出して仕事をしていただければというふうな事で期待をしているところです。

それでうちのほうを実際に終了して、それぞれの工務店、建築会社で建築大工等で働いているわけですけども、更に上の資格を取るために在職者訓練というの、うちのほうで無料で講座を開設して夜に勉強していただく。これについては1級技能士の課題とか、更には指導員試験とかそういう部分にチャレンジさせるというふうなことで、終了後も多少なりともフォローしながら実施しているところです。何せ、うちのほうは2年間と言う短い期間ですが、就職先については工務店さんのほうにお願いするというふうなことです。基本的なことをしっかり身につけて、後は工務店さんのほうで、それぞれ自分の進む道、木造建築をやりたいのであれば木造建築、プレハブであればプレハブというふうなことで、それを選択していただいて飯食えるように頑張っていたいただければなあというふうな事で実施しているところです。

うちのほうは県の施設として、いろんな職場で対応できる人をつくりたいというふうな事で考えております。色んな技術、技能あるわけですが、それはほとんど基本的なことしか教えることできませんが、やっぱり取り組む姿勢、それから職場関係、特に仕事をしながらですね、掃除等きちっとできるような人というふうなことで考えているところです。先ほど話したように、今の1年生は19名入っています。県内各地から来て、寮に入っ

たりしています。その中で5名ほどは工務店経営者の跡取り、更には大工さんの後継者というふうな事で勉強しているところです。ビデオにも出てましたけれども女性の方も、入って訓練を受けているという現状です。女性の方が工務店等で仕事をする場合に、私は女性の方のほうが大工さんとして続けていくのであれば有効かなというふうに考えています。というのは、お客さんとの接する場合に男性の方は家を建てる男性の人は、お金は出すけれど口は出せない部分です。台所とかそういう部分はね。そういう部分に女性の大工さんがいれば奥様とコミュニケーションよく対応できるのではないかと、更には男性の職人では気づかない部分が、柵一つとってみても色々あると思います。そういう部分も含めて、是非これからですね、今現在女性の方も活躍している職場もいっぱいありますけれども、さらにその部分が活躍できる職場かなというふうな事で考えているところです。

それで一つだけ工務店さん等にはお願いですが、なかなか今、齋藤さんの方からも話があったように、仕事がないということで、職人を育てられないというふうな環境です。そういうところに、うちのほうで学生を就職させるわけですけども、将来を見据えて是非使っていただければと。今、職人の世界は高齢化が進んでいます。60歳前後の人がですね、第一線で働いているという状況ですので、そこに若い人を育てていただければというふうな事で、その辺をお願いしたいと考えているところです。よろしくお願い致します。以上です。

北原 はい、ありがとうございました。今の最後のあたりの話ですけど、例えば去年とか卒業なさった方で、今県内とか関係なくそういう建築に関わる現場に就職される、出来る方というのは比率的にはどうなんですか。

越山 就職される方ですか。うちのほうは無料紹介業務という紹介業務を介しながら、1年ないし1年半のうちのほうの職業訓練を受けている中で、自分で進む道を自分で見出してもらおう。というのは、木造の方に行きたいのであれば木造の方

に、更にはツーバイフォーに行きたいのであればツーバイフォーと。そして更には建築の世界の場合は、建物自体がその工務店の看板をあげていますので、行きたい工務店を選択して、そこにアタックさせる。そして面接等を介して、お陰様で先ほどの紹介では99点何パーセントというふうなことで、ほぼ100%に近いほど就職は可能になっていると思います。

北原 はい、ありがとうございました。今、おっしゃったように県内にも県の機関、それから先ほど二川目さんが通われたような機関とか、若くして学んでいける、そういった機関があるわけなんですけれども、そういうふうなもので学んでいった人達が、尚且つ現場でもう1ぺん学びながら手に職をつけていくという、非常に長期的スパンで考えなければいけない。ただし、現場としてはこういう時代ですから、即戦力が欲しいという状況の中で、頭では分かっているけども中々若い人達と一緒に現場を作っていくという機会が、やりにくい状況になってきたというのが、1番の問題かという気がします。

ちょっとこのあたりで、島崎さんの方からは家を造っていく本当のプロセス全部がみられて、とても楽しかったのですが、実は聞きたいと思ってた一つに、島崎さん自身が関わっていらっしゃる、さっきから少しご紹介している「職藝学院」という学びの場所があるんですが、さっき僕、実はこのパンフレットをちょっといただいたんですが、このタイトルといいますかね、表紙のところにこんな文章をかいているんですね。『職藝とは伝統によって培われてきた職人の技を意味する職と、用の美と、その芸術性を追求する職人の心を意味する藝とを結んで生まれた新しい用語です。職藝学院はこの言葉を建学の理念に掲げて、日本の伝統芸術を継承していくと共に、21世紀にふさわしい建物づくり、環境づくりに携わる新しい専門家の育成を目指しています。』タイトルは富山インターナショナルカレッジオブクラフツアンドアーツと、まさに工芸とですね。という形で

職藝なんでしょうけど。そもそもこういうふうなもの、確かに県が様々な訓練の学校とか、持っているというのは分かるんですけど、こういうシステムをしっかりと唱えた大学ではないんでしょうけど、こういうものというのではないんでね、そもそもこういうふうなものを富山で、そしてそれに島崎さんが関わりになるようになった経緯とか含めて、お話を聞きたいんですがいかがでしょう。

島崎 うちの学校は創立13年目なんですよ。それでその10年さかのぼってスタートというか、要するに職人がいなくなってきたと。このあと大変なことになるんじゃないかなと。だからそれを考え出したのが、富山に設計士40人くらい使っておる三四五設計といって稲葉實と言いますが、その人から私の5歳位年上なんです。一杯飲みながらそういう将来の話を始めたのがきっかけといいますか、その時点で私は個人的には、弟子は何人ずつかとして育ててはあったんです。それくらいじゃとてもじゃない、もっと大きいスタイルでなんか出来んかなという、その話し合いが10年間あったわけですね。あったことはあったんですが、それは一杯飲みながらのスタートだったので、そんな事できるかなと。とりあえず必要は必要だということで、話し合いをして、まさか本当に実現するとは思ってらんかったんです。実現するようになったら、逃げるわけにはいかないので、わかった。よし、ならやろうと。各企業さんに寄付金を募って出来た学校なんですよ。だから一つこういう学校を作るということを目標立ててやった以上は、途中で今はこんな時代じゃないからとまぎえるわけにもいかないし、いまの例えば先ほど造っているのを見せたように、就職して就職先の親方が何を言うかという「お前、クギ1本打てんがかな」と。考えてみたらクギ打たしたことないですよ。(笑)木を組むことばかりやっているから、クギ1本打てんと。「あっ、そうか、だけどそういう事をしている暇もねえしな」と。ちょっと偏った形では来ておるんですけど、これからもそれを曲げるつもりもないし、とりあえず、そう

いう形でスタートして13年目の更に10年前にスタートしたというか、10年間の期間を色々ディスカッションしながら、今の形になったというか。



島崎英雄氏

北原 この機関は全くの民間機関で、その場合の資本金というかお金はいくつかの企業から、それはやっぱりアレですか、業界理由とその出口に関係するような、建設とか空間に関わる方々の企業なんですか。

島崎 そういったのが多いことは多いですが、全てがそうではない。意気を感じて出してやろうという、ね。

北原 そういのがないと、気持ちだけはあってもできないということですよ。

島崎 逆に、その10年かかったというの、そういうことがネックで10年もかかったということにもなるんです。

北原 そういところというのは、お金を支援するというようなやり方もあるでしょうし、例えばそこで育てた人達を積極的に、とりあえずインターンというような形でもいいから「是非うちの現場で育ててみようじゃないか」というみたいな言い方で、そういう連携をしてくださる支援もあると思うんですけど、そういうのはどうですか。

島崎 それもちろん、学生が2年間の間に実際にその会社、ハウスメーカーなりへ修行に出すんですよ。そこで実際の実社会を見てこいという期間が今度11月にあるんですけど。そういう時には徹底してそういうところでしごいてくださいと、お願いしますということで、協力してもらっとるという。



北原 越山さんの学校では、さっきの2年間のカリキュラムの中で、生徒さんたちがいわゆるこちらの地域の現場のところなんかには実習というか、そういうプログラムというのは用意されているんですか。

越山 はい。どうしてもですね、工務店とかどういふふうにして動いているかということも含めて、1年の時に少ないんですが1週間ほど体験させております。もう既に終わってあります。

北原 もう一つだけお聞きしようと思ったんですけど。どういう人が入ってくるかと。さっきちょっと打ち合わせがてらしゃべってる時に、僕らがイメージしていると思えないような方も生徒になっているという話も聞いたものですから、いったいこういう学校にどんな人がね、どんな目的を持って来るのかというのがすごく気になったのですが。

島崎 今、ちょっと変わった人というと、イギリスの家具職人が日本の建具を勉強をしたいということで、学生として入って頑張っております。そういう人は、過去に2人、今が3人目なのかな。現役の中学校の校長先生が1人、学校をあと3年ほど残して辞めて、「もう3年ぐらいどうして頑張らんがだい」と言ったら、「いや、もう3年やると年が行き過ぎて、ちょっと習うには遅いと思う」「だって今だって一緒だよ」(笑)一緒だよと言うけれども、本人は深刻で、1番最初の校長先生を面接した時には私と一緒にいたんですけど、年が。だから「私はもう辞めようと思ってるんだ、この年になって。今からやるってどういうことなんや」

「いや、私はその子どもの時から教師になろうと思っとらんかったんや。絶対大工になりたかったんだ。それを絶対貫いていきたいんだ」と。最初は私が面接したのではない。2回目の時に私に、私は事務局の方に断れと。そんな年いったのに私は教えれん、というので、断れと言ったら事務局は「棟梁から断ってください」と「わかったよ」と。来られた時には「もう辞表出してきましたよ。僕もう行くところがないんですよ」というわけで「えーっ」で、とりあえず学校には迷惑はかけない、就職を世話してくれとかそういうことは一切言いませんということで、無事2年間卒業して、卒業する間際に一番最初に就職を決めたのがその先生だったの、工務店に。その工務店の棟梁がすごい年で70超えとったんじゃないかな。「わーいがあったな、そこにいったら若いんだ」と言って。山形からきておられます。もう1人、女性で50位の学校の先生なんですけど、その人も今、1年生で頑張っています。家具を作る仕事をしたいんだと。そこも子どもがもう大人になったから手がかからない。だから今度私の好きなことをやりたいんだと言って、入って頑張っております。だから色んなパターン、1級建築士もおれば、建築科の大学院を出たのもおれば、さまざまです。

北原 最初考えていらっしゃる時には、そういう方々が受けてくるとは、あまり想定していなかったですか。

島崎 絶対それはあり得んことだと思っていた。

北原 逆に言うとそういう職人というか、そういう職みみたいなものを是非学びたいという気持ちは、学生であるとかまだ若いとかいうことではなくて、幾つになっても学んでとにかく手につきたいみたいなことって、ずっとあるということですよ。

島崎 気持ちはね。気持ちは多分そうなんだろうと思う。でも若いにこしたことはない。(笑)

北原 そうですか。分かりました。ありがとうございました。一通りお話を聞いてそして今その「職藝学院」という、もともとの名前は国際職藝

学院ですかね、名前ですらされて、今やっぴらっしゃるといふ事についてもお聞きしましたけれども、さっきからずっとお聞きした中でやっぴり気になっているのが、これは齋藤さんが最初におっしゃった言葉かもしれません。今日のこのフォーラムのタイトル「すまい職人きらりアップ」職人の魅力みたいなものをもっと感じたいと。そして若い人達に次の時代に続けていくような職人というふうなものの技を継承しながら、地域に関わってもらいたいという気持ちがあるんですけど、そういう職人を育てる環境に、今あるかどうかというあたりが、非常にシビアな話だというのが、さっき齋藤さんからもありました。余裕があればもちろん、例えばさっきのお話じゃないですけど、富山でも一般の企業がお金を出し合って、そういう教育機関を作ろうとか、みんなでどどん、どどん使ってあげようみたいなことになっていければ、それにこしたことはないんです。さりとて、しっかり力を持った人を雇わないと、なかなか仕事があまくいかないという状況の時に、そういうふうにとどんどんやっていると、若い人たちが中々行く機会がなくなるというんで、益々どんどんやりにくくなっていくという状況なんですよ。

これは、今ここでぱっと、この3人、4人でしゃべって、答えがでると思えませんので、ただ、やっぴり今日、後半の話です、すまい職人きらりアップフォーラム」としてはですね、どうやって、つまりどこら辺を何とか頑張ってもいいから、職人さん達が一つの職能として、若い人達を選んだり、あるいは地域の中で仕事を継続していきけるような環境を作っていくべきなのかということについて、少しお話をしていかなければいけないと思っています。いい答えが出てくるとは思いませんが、でもどこがどういう努力をしなければいけないのかみたいな話とかを考えていきたいと思うんですけども、ちょっとその前にお聞きしたいのは、例えば齋藤さんの会社なんかで、若い人達がいってきってくれる、でも多分高校ぐらまでの時に、そんなにいっぱい能力を蓄えてきて

ているわけではなくて、やっぴり現場に入って初めて、ほとんど新人みたいな力である。でもその方々に教えるとか、指導するという場合は、やはりそれは自分たちのこの先輩達が、現場でどんどん教え込んでいくというスタイルをとられるしかないんじゃないでしょうか。あるいは、どっかそういう学びの機関みたいなものとかがあったほうが楽なんですかね。

齋藤 うちの場合の事なんです、高校3年生終わる当時は、昔の人達から見るとまだちょっと大人になっていない方が、大学生でもそうなんですけども、ちょっとまだ大人になってない状態で、遊び半分の状態で、はたち過ぎてもまだすねかじりという感じでおるわけなんです。ただ、仕事に入ると職人の卵でありながら、給料をもらうわけですから、食べていかなければいけない、そこで、そうすると、責任感というのを持ってほしいわけですよ。ただ、責任を持って、持てと言ったって、どうすればいいのか誰もわからないわけですよ。とりあえず職人の棟梁につけて、まずマナーとか挨拶とか、毎日うちでも朝の朝礼はやっているわけなんですけども、礼に始まりですよ、とにかく。そして片付けとかお客さんへの挨拶の仕方、やはりそれもマナー。職人に対しても、そこに礼がありマナーがあり、マナーから全部始まらないと全然ないと。学校では、マナーは教えておるんでしょうけれども。

北原 やっぴり大工さんの棟梁とかの脇ですと生活をしながら、見ながらマナーというか、その部分から入っていったという事を現場ではありたいというお話です。そういうマナー教育みたいなというのは、如何なもんですか。越山さんのほうでは。

越山 機会がある度に、情報カフェを介しながらとかセミナーを実施したり、さらにうちのほうでは、実習するのは、とにかく綺麗にする。徹底して掃除をするというふうなことで考えております。自分達で使う作業する環境の部分特に念入りに掃除していく。自分で散らかした部分につい

ては自ら片付けていかないと、やっぱりリフォームとかそういう場合の部分については、お客さんが仕事をしている中に入って行くという仕事です。その辺を十分鍛えているつもりですが、なかなか浸透しないという部分もありますけど。

北原 あの二川目さんにちょっとおききしたいんですけどね。あなたは全くゼロから現場に入られて、現場で優しく先輩達に色々教えていただきながら、現場で様々な学びましたよね。と同時に2年間能力開発のほうで、学びましたよね。学びの場所としては、働きながら2ヶ所持っていたわけですけども、それぞれにちょっと意味が違うような気もするんですけど、今思い出されてそれぞれの学びとして、あそこではこういうふうな事をやっぱり学んでよかったみたいだね、違いはありますか。現場の世界ともう一つ、1週間に2回通っていた学校、だからこそ味わえた事みたいなのを少しお聞きできたらと思うんですけども。

二川目 訓練校では、他のペンキ屋さん、会社も一緒にやっていたんですね。その時に他の会社ではこうやっているよとか。いろんな情報交換ができたんですよ。その面でも、色んなアドバイスももらったりして、職場ではマナーも挨拶から掃除から技術からも、全部仕事では学びましたね。

北原 つまり訓練校の中に行くと、同じようなところで学んでいるような世代の、他の職場にいるような人達と横のネットワークが出来るというのがおもしろかったですか、そういうのが。

二川目 おもしろかったです。ただ、大工さんもうちらみたいなのもそうなんですけれども、全然若い人がいなくて事業が成り立たない状態になっているんですよ。塗装がそうなんですけども、そうするとやっぱり交流持てなくて、やっぱり楽しみもそうですし.....。

北原 行っても生徒が少なくて.....。

二川目 そうです。

北原 あなたが行ってらっしゃる頃って同じ様な仲間、塗装の学ぶ時ってというのは、いわゆる同級生として一緒に学ぶ人はどれくらいいたんです

か。

二川目 5人で、やっぱり授業が出来るというのですから、

北原 最小単位みたいなのが.....。

二川目 そうです。その時にたまたま運よく5、6人いたので、その時には一緒に活動できたんですけども、私の1級下から1人、2人しかいなくなると、それで授業が受けられない状態になってしまったんですね。それなので、一緒に何かをするという楽しみも半分なくなったりしたんじゃないかなと思いました。

北原 そういう事を学びたいと思っている人が少なくなっているということなのか、それともいるんだけどなかなか職場の方でそういうふうな余裕がなくてね、「行ってきなさい」みたいに言うほどの今、環境にないのかという、どっちかという話なんですけど。この辺はどう思います？下の人達を見ていて。別に急にそんな勉強したくないとかいうわけではないと思うんですけどね。

二川目 何事も就職して仕事して、勉強もやっぱりあるので、やっぱり行ったほうがいいと思います。

北原 今考えるともうとっくの前に終わったことだから、どんなに苦労しても全部笑い話になっちゃうかもしれませんけど、やっぱり働いていて、尚且つそっこの学校に行って、学校に行ったら行ったで何か課題を仕上げたり、宿題はないのかな。何かそういうのあるでしょうから、仕事との両立みたいなのは結構大変だと思うんですよ。そんな苦労はなかったですか。

二川目 なかったです。やっぱり仲間がいたんで、アドバイスし合ったり、笑って過ごせたりも結構しました。

北原 なる程ね。島崎さんの学校って、今彼女みたいにどっかの現場で見習いに入っていて、こちらはこちらでという二束のわらじみたいな感じの人も結構いるんですか。

島崎 いや、それはカリキュラムの中で2週間な

りお願いすると。いろんな常識的なことの勉強とかいうのは、うちの学校は“あじみそ”というのを作っている。“あじみそ”あいさつ、時間を守る、身だしなみ、掃除。それだけを毎週必ずチェックして、担当を決めてやるというのをやっています。掃除は出来ない、それはそうなのかもしれない。それは自分もその時分どうであったかわからないけども。そういったことから、まず挨拶が出来るようにする。ルールはしっかり守れと、その辺は厳しくやっています。

北原 ありがとうございます。ま、そういう今の“あじみそ”じゃないですけど、そういう気持とかマナーの部分というのは、しっかり教えていくという話と同時に職人さん達がしっかりと若い人達に技能を継承していけるような社会を作らなければいけないということから言うと、今までは現場でできたという話を今回、富山のほうにあるような学院とか、あるいは実際に越山先生が勤めていらっしゃるような所、他にもいくつかそういう機関が違いますけれど、職業とか職能とかいう名前がついた教育機関が今わりとあるんですけども、なかなかそういう存在というものが世の中に知られていない部分とかがあって、そういうところから出てきた人達にどんどん、今回の二川目さんのように新聞に出たりするとですね、若い人なんかもそういう塗装の技術で、2級とか1級とかあるんだみたいな、それだけでも十分広がってくると思うんですけど。

最後にちょっと一言ずついただきたいんですけど、印象でいいんです。今日のタイトルすまい職人の現状と課題、すまい職人が輝くためにという、こういうことに対して、今、最後に改めてさっきまでおっしゃっている話の延長で結構なんですけど、すまい職人が輝くためにと言われた時に、こういうふうなという形の一言最後に、ここにいらっしゃる方々に、業者の方もいらっしゃいますし、あるいは建設業に関わる方もいらっしゃいますし、そういう方々に対し誰に対してかはともかくとしまして、輝くためにどんなふうな事を今日ど

うしても言いたいんだというふうなことを一言ずつですね、今日のパネルディスカッションは終わりにしていきたいと思うんですけど。

言葉としては「すまい職人が輝くために」という言い方をするのは楽なんですけども、そのために今本当に、少しすぐに効果が出なくても、やっておかなければいけない事はないんだろうか。あるいは無理だと分かっているけども、そっちの方向をみんなで見ていかないとダメなんじゃないかみたいな事についての危惧でも結構です。一言ずつお話をいただいて、島崎さんからもセッションをいただければと思います。ここでいきなり二川目さんと言うとかわいそうなので、順番は越山先生からということでもよろしくお願いします。

越山 すまいに関わるといえば、鳥の世界でいえば巣を作るというふうな事で置き換えられるかと思いますが。地域にあるものを活用しながら、そういうふうに鳥でも巣を作って自分の環境を整備しながら生活していくという事ですから、それを人に置き換えればいいというだけの事かと思えます。だから、そういうすまみを提供する人、それになるためには、そういう職人になるためには、やっぱり1日という場合にもいかないし、日々少し長い修行といえればあれですけども経験が必要かなというふうな事で考えています。だから、その為にも基本的なことをきちんと勉強して、それで更にその上に自分で何をすればいいのか、その辺を肉付けをして更にはそれに関わる色んな資格が付与されています。その資格を取りながら、やっぱり自分を資格でアピールしていかないと世の中では認められないかなと思っておりまので、その辺でいくらかでもうちのほうでアドバイスできればなと思っています。だから自分の好きな分野を、建築大工であれば大工の好きな分野をひとつでもいいから、自分の得意な部分を早く見出して、そこを日々勉強していただければなと思います。

また青森県では、昔から非常に立派な大工さんが生まれています。弘前では西洋建築をやってきた堀江佐吉さんとか、青森市においては宮大工の

大室勝四郎さん、青龍寺の五重塔を造っている立派な宮大工でもう亡くなりました。更には県南のほうでいえば、職業能力開発施設のほうで一生涯懸命頑張っていた田子町の大工さんの佐藤正さん、この方については技能五輪の全国大会で青森県から建築大工部門で3人もの日本一を出していただいた方です。残念ながらもう死亡されている方ですけども。そういうふうにして青森県でも立派な大工さん、また育成してきている人もいっぱいいるわけですので、そこで教わった人も多数いるかと思えます。そういう人も含めてこういう木造建築とかそういうふうな技能技術の世界は継承していかないと廃れてしまうかなというふうに考えていますので、その辺もよろしくお願ひしたいと思えます。以上です。

北原 はい、ありがとうございます。では齋藤さんからよろしくお願ひします。

齋藤 皆さん、全国各地にどっか観光に行こうかなという、大抵神社仏閣とかもしくは昔の宿場町とか、とにかく古い所に行くとなんかさっぱりする、ホッとする、そういうところがありますよね。温泉に行っても古い所に行けばなんとなくさっぱりすると。ほとんど木造、日本は木造建築が多いものですから、そういう昔からの流行り廃りのないものが非常に好まれるだろうと思っています。そういう意味では、神社仏閣は、大工さんは別な種類と考えてもいいかなと思っているんですが。私たちは民家をやって続けていかなければいけないと思っております。これは農家でも同じです。

やはり在来もしくは伝統構法をなんとか金物をまるっきりゼロというわけにはいかないでしょうけれども、出来るだけ金物がなくても、もしくは若干あってもなんとかやっていけるようなものがあれば、色んな味が出たり、価値観が非常に長持ち、価値観がずーと長持ちするのがいい家だなと、洋風な家は洋風の家としての価値観もあるんでしょうけども、是非そういうものを官の側でも色んな仕事を通じて、仕事を出してもらえれば大工さ

んにも仕事がいきわたり、その大工さんだけでなく、色んな左官屋さんなり木建、建具屋さん、それから製材所の方にも青森県のヒバとか杉とかいっぱいあるわけですから、それを大いに利用できるような環境づくりをお願いできれば、やはり職人が生きていける。生きていけるという事はみんな長続きするわけですよ。これが産業としても残る方法だろうとは思いますが、常に競争、競争でばかり言っているかもしれない。職人は技を磨けばそれが生きる糧にもなるのではないかと考えております。そんなところでございます。北原 はい、ありがとうございました。では二川目さんからの感想で結構です。お願ひします。二川目 私は経営する側とかそういう難しい事はちょっとわからないんですけども、学生さんとか後輩達には、学生さんとかは文化祭や体育祭で、みんなで一つのものをつくり上げるじゃないですか。その時に、終わった時に、すごい感動があると思うんですね。私もそうでした。それと同じで、一つの建物をみんなで造るといのはすごいことだと思うので、そういう達成感もすごいありますし、その時にお客様に喜ばれた時もすごい自分自身もうれしくなるんですね。そういうやっぱり気持ちも大事にしてほしいなと思っています。

北原 はい、ありがとうございました。では島崎さんのほうから少しコメントいただきたいと思うのですが、よろしくお願ひします。

島崎 私が学生にいつも言っとるのは、今やっとなる事は、数千年の歴史があるんだと。これは大変なことなんだと。それを努力して受け継いでつないでいくという大変な役目がある。プロ野球の選手とかなら、間に合う人がいてプロになるんだろうと思うんだけど、みんなはここで、この仕事で食べていくんだと。全部それで確実にプロにならんやダメなんだと。だから努力は自分のためだから、絶対努力せ！と。それだけの値のあることをやっとなると。数千年の歴史があるというのは、本当にすばらしいことだと思うんです。本当に日

本の文化だと思うんです。こういったのは、どう  
いうふうにかして残していく。残していくために  
は何を努力するか。

つい最近、日本でも伝統構法を守る会というの  
が、あちこちで出来てきたんですよね。今、色ん  
な基準法でなんか大変難しいところへ来ておる  
と。それで私にも入ってくれというので、とりあ  
えず来て、講演してくれと。なんで講演するかい  
うと、東京で本当にそういうものを建てたんだと、  
ということは、私らもすごくそういう入ってもら  
うことで、みんなの自信になるんだと。できるん  
だと言うその熱い気持ちを聞いたもんだから、わ  
かったいうて、一応それに入ったんですけど。と  
りあえず若い人達は努力して何かで食べていかん  
ならんことは間違いないので、そこをどこで見つ  
けるか。やはりプロになると言っても、プロ野  
球のプロとは違う。本当の職人、それで飯を食べ  
れる職人を目指すんだと。「これ出来なかったで  
辞めるわ」じゃダメなんで、努力すれば誰でも出  
来るんです。だからそれは学生にいつも言ってい  
ます。そんなところです。

北原 ありがとうございます。本当に今、最  
後におっしゃった話というのが、ある意味でその  
事にすぎりながら僕は先を見ていかなければい  
けないようなお言葉だと思いましたけれども、最  
後に私のほうで今日の皆さんのお話と島崎さんの  
コメント等を含めて感じた事をお話したいと思っ  
たんですが、そもそも今日のこのフォーラムなんで  
すが、最初のお話して部長さんの方からありまし  
たように、青森県にある事業で「すまい環境きら  
りアップ事業」と、職人ではなくすまい環境きら  
りアップ事業と。ご存知のように今の時代は新し  
い建物を造っていく時代から、造った建物をこれ  
をカタカナでストックと我々は今対応しますけ  
ど、ストックをいかにしてリフォームとかしなが  
ら、次の時代に残していくか、つなげていくか。  
ストックを育てるといいう言い方が一番いいのかも  
しれません。残していくという言い方をするとジ  
リ貧なので、むしろストックそのものを育ててい

かなければいけない。ストックを育てていくとい  
う場合には、新しい技術も勉強しなければいけ  
ないし、今島崎さんのお言葉にあった、数千年の歴  
史を培ってきたものをしっかり学びつつ、新しい  
時代に合わせるように色々と変えていく事もしな  
ければいけないし、そういう能力は前のものを学  
びながら、直しつづいものを造っていかうと。  
それがストックの時代の一番大事なところで、私  
たちはストックの時代という、新しいものを造  
るお金がなくなったから古いものを使えばいいん  
だみたいな言い方がありますが、とんでもない  
と。古いものを使っていくストックの時代だから  
こそ、技術革新も非常に大事でそしてたとえば二  
川目さんみたいに若い人達が、技術をしっかり学  
んでその新しい場面に関わってもらうことが必要  
なんだと思います。そういうことで実はこのフォ  
ーラムでは、リフォームや新しい建物を造りなが  
らストックを上手く生かして育てていくような時  
代の時に必要なのは、古いストックをしっかりと  
学んできた年をとった職人の方々、ベテランの  
方々と新しくそこに加わっていくような若い方々  
とがうまくつながる事によって、ストックを前向  
きに使っていきようなりフォームができる、それ  
がきらり光っていくという、そういう意味からす  
まい職人きらりアップと。ただ単に古い職人の  
方々の技を学ぼうとかいう話だけじゃなく、その  
方々と新しい方々の意欲みたいなので、ストック  
が育てられていくという時代をつくっていかね  
ければいけない。そういう環境を作んなきゃいけ  
ないという話だと思うんです。

職人を育てられる環境をいかにして作っていく  
かというのが、今日齋藤さんからのお話で、当初  
職人が育たない環境なんだという問題提起があり  
ました。職人を育てられる環境をしっかりと、外  
堀をつくっていかないと前向きなストックの時代  
には出来ないだろうと思うんです。県のその雑誌  
でアレグロというのがありますが、アレグロとい  
うよりはやっぱりこのリフォームやストックの時  
代にはこれからはアグレッシブに攻めていく時代

じゃないといけないような気がします。そのためにも若い人達も一緒に考えていきましょうという世界を作っていくための職人きりりアップというのを、今日お聞きしていて思いました。なにしろ今日のタイトルはすまい職人が輝くためにと言うんで、最後になりましたが、正しいかどうか別として、今日の皆さんの4人の方から出た言葉を使って僕が感じた職人の7つの魅力をお話して終わりたいと思います。

1つ目の魅力はこれは島崎さんがさっき二川目さんにコメントを挟む時に言ったセリフをちょっと書いたものです。職人さんの技術は、人に取られたって減るもんじゃない、どんどん増えていくもんだと。学べば学んで誰にも取られるもんじゃない。そういう魅力を言い切るような職種があるかという話の時の1の魅力です。

2つ目。職人さんは学んで努力して、悩んで技術が上がっていけば楽しくなっていく。これもさっき島崎さんおっしゃったし、二川目さんも言ったような気がします。

3つ目。これはどなたがおっしゃったか、今ちょっと忘れまして。職人さんは難しい仕事を注文して欲しい、さっき齋藤さんがおっしゃたのかな。注文すればちゃんと答えを出してくれる人たちなんです。そういう魅力ある職種なんですね。それが段々なくなってきたので、張り合いがなくなってきた。難しい仕事を注文すればちゃんと答えを出してくれる職種である。

4番目。職人さんは様々な世代の人で成り立っていますから、若い人の悩みをちゃんと聞いてくれる先輩がいる。これは今日、僕が一番印象的だったのは、二川目さんがいくら職場の人が来ていらっしゃるとは言え、やっぱりそれに育てられたということを楽しくしゃべっていらっしゃるのは、僕はとても嬉しく聞いていました。

5番目。これも二川目さんの言葉です。職人さんは、苦労したり悩んだりする事が、その関わった仕事が完成した時に達成感に変わっていく。そうするとその時に関わった人に会いたくなくて

る。そういう事を言える職種って、今、世の中のキャリアの中でどれくらいあるんだろうかと思った時に、それは必ず魅力だと思います。

6番目。57歳の校長先生が突然、仕事を辞めて入ってきたという話を聞きました。私の知り合いでも40過ぎてからこういう学校に入りなおした人もいます。職人は年をとってもなりたい職種なんですね。無理だって言われましたけれども。体力がないと、若くないとダメだと言われましたけれども。そういう職業なんだというものを言えるものってあるからということ、我々はちゃんと、職人さん達は自負されていいかと思います。

最後は、これは最後の島崎さんの言葉にありました。職人さんは“あじみそ”に強いと。ということで、挨拶、時間、身だしなみ、掃除ですか、今日はいい言葉を聞きまして、今日は僕の研究室の学生が13人ほど、下から何行目かの列にズラート軍団のように並んでいますけれども、彼らは“あじみそ”に結構強い人達なんで、“あじみそ”という言葉、これは別に職人さんだけじゃないんでしょけど、我々の基本ですけどね。挨拶と時間と身だしなみと掃除って。これは別にマナーに強くなってくれという意味でなくて、こういうところから始まって、しっかりと学んでいくその一番最初の雰囲気を見る時に、それを評価してくれる人達はその“あじみそ”で見ているんだよ、というセリフだと思います。

職人さん達は、そういう形で今僕はたまたま七つ、もっといっぱいあるんでしょけど、時間もありませんので七つにしましたが、こういうふうな魅力を持った職種として、そして職人さんたちがうまくストックを能力として次の時代に続けてつなげていっていただかないと、実はリフォームなんていう事はできないんという事なんだと思います。今日のすまい職人の育成、青森県住宅リフォーム推進協議会というところの封筒なんかいただいて、この事業を進めているわけですけど、職人さん達をというものが次の世代につながっていくための一つの環境づくりみたいなことをして

いくために、今日、皆さんのお話を聞いて、ある程度皆さんが共通の理解を持てたと思います。なにしろ一番今日の収穫は、この中で一番若い二川目さんが「こういう仕事をしていて、そして達成感を味わって仕事ができるんです」とおっしゃってくれる事が、一番僕らにとってはうれしいコメントでして、そしてもう一つはこの中では一番高齢の島崎さんがパワーポイントを自分で操作しながらしゃべるといふこと事態が、だいたい年をとった方は次お願いしますと言ってクリックしてもらうんですけれども、彼は今日自分でやられる。そしてまさにストックを掲げる島崎さんが、新しい技術とかそういうものに対しても、しっかり貪欲にやっていかれるのをすぐ目の前で見れたことも、我々にとってはとても収穫でした。

今日は色々な方々が集まっていたいて、高校生ぐらいの方から年配の方まで来ていただきました。色々な立場でもあったと思いますが、ただすまいの職人のフォーラムという事だけではなくて、我々が将来に向かって自分のライフスタイルなりステージの中で、どんなふうに学んで、どんなふうに自分を自己実現したいかみたいな事について、いくつかヒントがあったような気がします。そろそろ時間になりました。最後になりますけれども、今日、とにかく富山から来ていただきまして、そして1時間半近くとても興味あるお話をさせていただきました。又あの二川目さん、齋藤さん、越山さんにはそれぞれのお立場で、本当に現実的な話とか、そして時には嬉しくなるようなお話をいただきました。最後に3人のパネリストの方、そして何よりも最後にコメンテーターも務めていただきました島崎さんに感謝の拍手でこのフォーラムを終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

司会 パネルディスカッションご参加の皆様ありがとうございました。お疲れ様でございました。もう一度大きな拍手をお願い致します。ありがとうございました。これをもちましてフォーラムを

終了させていただきます。皆様、本日はご来場いただきまして本当にありがとうございました。又関連イベントといたしまして、11月8日と9日の土・日でございますが、青森産業会館におきまして、すまいアップフェアが行われます。どうぞ皆様、ご来場いただきますようお願い申し上げます。本日はありがとうございました。

---

## すまい職人きらりアップフォーラム2008 報告書

平成20年11月

発行 / 青森県県土整備部建築住宅課

〒030-8570 青森市長島1-1-1

電話017-734-9695 FAX 017-734-8197

ホームページ<http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kendo/kenju/index.html>

---